

# 「言語文化学」への試み（1）

## —「気」表現の分析を糸口にして—

池田正年<sup>\*</sup>・島本孝治  
西脇宏・広瀬浩三

### 0. はじめに

本稿は、「言語文化学」という枠組を基盤とする研究プロジェクトの一貫として位置づけられるものである。

このように切り出すと、すぐさま「言語文化学」とはいったい何を研究対象とし、どのような方法論を用いてその学問的目的を果たそうとするものなのか、という枠組そのものに関する疑問が投げかけられよう。複数の研究者グループによって構想されようとするこの研究プロジェクトの目的の一つは、まさにこの疑問に答えることにあり、「言語文化学」とはどのような位置づけができ、その研究成果がどのような貢献を果たすことができるのかは、本稿に端を発し、その後の実践的分析を通して明らかになっていくであろう。

「言語文化学」を提唱し、比較的一般の目にふれやすい研究成果として残されているものに、斎藤武生『言語文化学事始め』（開拓社言語文化叢書、1983）があり、「言語文化研究」、あるいは「言語文化学」といった用語や生い立ちを識ることができる。斎藤武生によれば、「言語文化」なる言葉は昭和11年に垣内松三<sup>かいとうまつぞう</sup>が『国語の力』の改訂版で、「国文学体系」の章を「国民言語文化」に修正したことに始まったとされる<sup>1)</sup>。しかしながら、斎藤（1983）は垣内（1936）の時代の「言語文化」が、「国語文化」ないし「国語教育」に置き換えられるものであったと指摘したあと、時枝誠記の「言語は目的をもった行為であり活動であり、人間生活の一形態<sup>2)</sup>」であるとする「言語生活」の定義や、西尾実の「文化生活」に対比されるどころの「言語生活」論を紹介している。また、西尾孝次が言語哲学的色合いの濃い著書『言語と文化』のなかで「言語文化学」の語を用いていること、柳田國男、

---

\* は代表執筆者

池田弥三郎、折口信夫にふれながら、松村武雄の「言語と民俗」の比較考察の果たした役割について述べ、1970年代から、各大学等公的機関において「言語文化研究」の名のもとに様々な「言語文化学」が実践されてきた状況に触れている。また、一貫して言語と文化の関係を追求してきた代表的な研究者として鈴木孝夫が挙げられ、言語学を志すすべての者が一度は紐解くといっても過言ではない『ことばと文化』（岩波新書）以降、外国語・外国文化との比較を提示しながら、積極的に「言語文化学」を展開し、その研究の軌跡を示すものとして出版された最近の書物のタイトルが、『言語文化学ノート』とされていることは、鈴木 of 学問的立場を象徴的に表していると言える。

このように、本研究プロジェクトで提唱していこうとする「言語文化学」については、ほぼ近い観点からなされた先行研究もいくつか見いだせるが、すべての学問が言語と無縁ではいられないこともあって、「言語文化学」というものは既成の学問との領域区別を明瞭な形でつけることは容易ではないし、慎重を期す必要もあろう。しかし、直観的には、社会言語学や（言語）文化人類学、民俗学などと重なる部分が多いと思われるが、その明確な定義づけは今後の課題としたい。

現時点で、われわれの共通認識として通底するものは、「様々な形式によって表出された言語表現をつぶさに吟味することによって、人間の営みの集積である文化の諸相を浮き彫りにする」という、ある意味で「素朴」とも言える言語観である。しかしながら、こうした言語観は、最先端の言語学において新たなパラダイムを形成するに至っている「認知言語学」（Cognitive Linguistics）の考え方とも合致するものであり、その発展過程で改めて議論されている「サピア・ウォーフ仮説」として一般に知られている「言語相対主義（Linguistic Relativism）」とも大いに関連し、その妥当性にも一石を投じることになるような考え方である。言い換えると、本研究プロジェクトの「言語文化学」も究極的には「言語・思考・文化」の相互のつながりを解明していくことを目指している<sup>3)</sup>。

こうした「遠大」とも言える目標に向かって研究をスタートさせようとしている本プロジェクトが採るアプローチの方法は、ある定まった理論的枠組みから出発する演繹的なものではなく、逆に、具体的な研究課題を設定しながら、その分析を積み上げていくことにより全体的な姿を明らかにしていこうとする、むしろ帰納的なアプローチと言えるものである。母国語である日

本語と日本文化を軸にしてテーマを定め、各執筆担当者がたずさわる英語、ドイツ語、フランス語に関する語学的・文学的・文化的知識を駆使するとともに、外国語、外国文学の教師として積み重ねてきた経験に基づきながら、さらに前進しようという新たな視点から「言語と文化」の関係を追求していくことになる。その最終的な成果としては、日英、日独、日仏の言語文化の比較にとどまらず、英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏にまたがる言語文化の類似点や相違点が透けてみえることを期している。

本稿では、まず第1節で「言語と文化」の関係を日本語ならびに英・独・仏の三言語をふまえながら概観し〔執筆：池田〕、さらに第2節では具体的な分析対象を「気」の表現にしぼり、本プロジェクトで構想する「言語文化学」的視点からその問題点を明らかにする〔執筆：池田〕。そして、第3節が具体的な分析となっており、「気」表現が用いられている平易で日常的な日本語の文と対応する表現を英語、ドイツ語、フランス語にもとめ〔執筆：広瀬（英）、西脇（独）、島本（仏）〕、その比較検討をとおして、日本語の「気」表現の独自性を再確認し、その「言語文化学」的位置づけを試みる〔執筆：島本、西脇、広瀬〕。なお、「はじめに」と「おわりに」は、執筆者全員の考えをまとめたものである。

## I. 言語と文化

欧米人は、日本人が“yes, no”の返事をはっきりせず、結果として嘘をつかれた、だまされたという印象をもつことがあるようだ。フランス人に日本語を教えるとき、日本語の「嘘」という言葉の用法がかれらにとっては存外難しいことに気がつく。「嘘は泥棒のはじまり。“Le mensonge est le père du vol.”」などは、悪魔の別称を“esprit du mensonge”というだけのことではあって、「嘘をつく“mentir”」ことは「人をだます意図をもって、真実とは違うことを故意に強調すること<sup>4)</sup>」であるから、かれらにはすぐ理解できる諺である。しかし、日本語の「嘘」には「だます」という語感が希薄なようだ。『広辞苑』では、「嘘字」は「正しくない字」のことであり、「今やめるのは嘘だ。」は「今やめるのは適切でない」ほどの意味であり、「人は嘘にて暮らす世に（『閑吟集』）」となると、どうも昔から日本は「真実を言っては暮らせない社会」になっているらしい。欧米でも「嘘も方便」に類する

ものはあるが、この嘘は「罪穢れのない嘘“mensonge innocent”」のことであり、日本人のように「嘘にて暮らす」習慣はない。イギリスなどでは、今でも、口約束こそが紳士の最高の保証であるという。日本は嘘について寛大な社会であるらしい。いや、むしろ、嘘こそが人間関係の潤滑油になっているのかも知れない。

日本語とインドヨーロッパ語族に属する英語、ドイツ語、フランス語とを比較してみると、その文法的相違にはじまって、文化——とくに風俗や心性（メンタリティー）——の違いからくる表現態様の相違が目につく。あらゆる言語がその属する文化的状況と必然的に関わりをもち、ニワトリとタマゴの譬えではないが、言語が文化を表現し文化が言語を規定するというだけでなく、今日のように異文化間の交流が活性化し、メディアが開発されると、時には言語が文化を先取りすることにより文化を規定することもあることから、一体どちらを優先的な決定要因ととらえるべきか困難なほど、言語活動の文化形成に与える役割には計り知れないものがある。卑近な例ではあるが、あるお笑いタレントが「赤信号みんなで渡ればこわくない。」と言ったとき、そこには日本の伝統的な集団民主主義が凝縮されていたのに対し、また別に「カラスなぜ泣くの、カラスの勝手でしょう。」が登場したとき、ここに不幸にも無責任個人主義の跳梁跋扈が予告されていたのである。コピー・ライターとかコント、お笑いの文化コメントとでも言える言説は、生活言語というよりメタ言語に近いものであるが、それだけに文化の本質を看破していることがある。さて、われわれは日本語と外国語の相違を分析することによって、言語の比較と文化の比較が同時併行的に可能になるのではないかと考える。

たとえば、日本語を英・独・仏の三言語と比較するとき、日本語理解の難関として挙げられるものなかに必ず「助詞」があげられる。日本語の助詞は、主格や目的格など様々な文法関係を指定する格助詞（「が」「の」「に」「を」「と」「で」「から」「まで」など）——三言語では、一部屈折変化などによって形式上文法関係をあらわせるが、日本語の格助詞に対応する機能は、前置詞などを用いることにより指定される——、一般に強調や比較の対象を指定する副助詞の「は」——これは三言語では強勢形などの音声的補助や前置詞句を用いて表現することができないわけではないが、これに相当する言葉はない——、「ば」「と」「ても（でも）」「から」など、文の接続を可能にする接続助詞——三言語ではそれぞれの接続表現形態をもつ——のほかに、

係助詞、終助詞、間投助詞とあって、それぞれに対応する三言語の表現は一応可能ではあるが、使われる状況に応じて情緒的意味づけを増幅するこれらの助詞を、そのニュアンスまで外国人が理解するのは容易なことではない。

英・独・仏の三言語の側から言えば、主語と述語の連結形態は厳密なまでに緊密で、その文法関係が重視され、主語の人称や(性)数により動詞が変化し、通常両者は文頭におかれ、会話にあっても省略することは不可能である——もちろん、慣用的な省略語法は別である——。日本で現場の会話を体験した外国人が最初にとまどうのは、主語の脱落にあるという。三言語の基本は、「誰が」と「どうする」にある。日本語にしても、とどのつまりは同じことなのだが、文化の基本精神として「みんなが」「誰に」「どうする」ことを認めることが肝要であるから、往々にして主語を脱落させたくなのが表現形態にあらわれる人情なのだ。これは一種の婉曲的な意志表現の方法を兼ねてはいないだろうか?少なくとも、言葉の発信人だけでなく受信人にさえ無意識的に安堵感を誘っているように思われる。

“I love you.” “Ich liebe dich.” “Je t’aime.” はどうして「愛してる。」であって、「ぼくはきみを愛している。」のではないのか。あたかも、日本語は「ぼく」と「きみ」を明示することを嫌っているかのようだ。上記の文意で「愛してる。」となれば、「ぼく」と「きみ」が重要なファクターであることは自明の理である。なのに、表現する言葉がないというのであれば、これはもう文化そのものが人称代名詞を拒絶しているとしか考えられない。日本文化には、どうもあからさまに表現することを忌み嫌う風があって、俳句にしても和歌・連歌にしても、思考・感情が三人称化するというか、普遍的にソフィステイトされないと愚とされる。季語や枕詞の設定もそんな了解からきているのだろう——もっとも、山上憶良がいたし、与謝野晶子がいたわけであるが、最近では俵万智の出現以来、作歌の常識、内容まで覆されようとしているのを見るにつけ、言語も文化も変化していく感を強くする——。三言語に関して言えば、“I”にしても“ich”、“Je”にしても、これこそが重要なメッセージであり、「愛する」という行為を表現するためには“J’aime”とか主語とセットでしか表現できない文法構造になっている。つまり、彼らにとっては「愛している」という暗示的な表現で相手に気持ちを伝えることが問題ではなく、まさに「(この)おれが」、「(目のまえの)お前を」好きなんだ、で、「君はどうなんだ」という具体的な意志表示が重要である。簡単に言え

ば、かれらは「スル」文化であり、日本人は「ナル」文化だと言ってもいい<sup>5)</sup>。今は「結婚スル」があたりまえだが、昔は「一緒ニナル」、いやいや、もっと昔は「一緒ニサセラレル」のが普通であった。

これだけをもって、三言語が日本語と異なり主体者中心的な言語だと規定するわけにはいかないが、日本語の主語、とくに一人称の単数に注目してみると、いかに日本人が相関的にしゃべっているかが理解できる。つまり、日本人は自分のことを「わたし」というニュートラルな呼称からはじまって、「ぼく」「あたし」、また「うち」「当方」「小生」ときたかと思えば、一気に時代をワープしたかと思わせる「拙者」「それがし」「こちとら」まで、数え上げたらしきがない。考えてみれば、主語を大切にす三言語において一人称単数形がそれぞれ一つずつしかないのに、おうおうにして主語を脱落させる日本語がこれほどまでの言葉をもっていることには驚かされる。では、日本人はこうした一人称単数形の呼称をどのように使い分けているかと考えれば、自分と相手ないしは他者との関係や、自分がおかれた状況のなかで、どの言葉を選択すべきか決めさせられているのである。したがって、「わたし」から始まるすべての呼称には厳然とした階級観念、あるいは対人自己評価がくだされているのである。階級観念にせよ、自己評価にせよ、欧米の国々にないわけではない、いや、むしろ日本より明確に存在すると言える。なのに、三言語には一つしか一人称単数形の呼称がないというのが不思議なのである。これはもう、メンタリティーもふくめて文化の相違としか言いようがない。

こうした事情を垣間見ただけでも、外国の小説翻訳や映画・テレビの字幕スーパーを入れるさい、物語の全体を把握してからでないといふ具体的作業に取りかかれないことが、容易に理解されよう。確かに、ちかごろは民主主義の人権感覚が徹底され文化の平等意識が言葉の平板化を急激におしすすめている感があり——最近の若い女性が、「ボク」とか「オレ」とか言うのを聞くと、日本語の性区別呼称法を乗り越えようとする努力すら感じてしまう——、外国文化や翻訳文化の影響もあり、時代や風俗のなかで醜態したいわば含意言語とよべるものが通用しなくなり、交通信号のような直接的で普遍的な言語、「平等」とか「平板」とかいったコードに支配された直示言語で用を足すようになってきてはいるが、自由を追求する社会に平等などあろうはずもなく、一国の文化のアイデンティティーがそんなに簡単に転倒するわけではない。

たとえば、英語で次のような台詞があったとしよう。

“He left the church.”

「彼は教会から出た。」でいいわけだが、「彼は教会をあとにした。」の方が場面の情感が溢れているとか、登場人物によっては、「彼(盗人)は教会から姿をくらました。」とかになったりする。これなどは単に表現スタイルの違いであって、それぞれの行動自体に違いはない。もう少し複雑な例をフランス語であげれば、

“Elle s'est fait coiffer les cheveux.”

この翻訳にあたっては、登場人物のステイタスに注意する必要がある。「彼女は髪をセットさせた。」(使役表現)になるのか、「彼女は髪をセットしてもらった。」(感謝ないし受け身的表現)になるのかを決めなければならない。

日本語は「～してもらう」(受益)とか「～してあげる」(好意)などの情緒混入の表現がさまざまあって、言語活動のなかでニュートラルな表現をはさむと鼻白む思いをすることがよくある。「(多忙なところを) 彼、来てくれた。」などはよく聞かれるが、海辺で釣りをしている親子の、「わー、お魚さんが釣れてくれた。」などと聞くと、きっと魚の方では「釣られてあげたよー。」などと言ってるのかと想像してしまう。被害者にまで仲間意識を押しつける文化の根底には、なにかしら不気味なものを感じずにはいられない。ついでに加えれば、土台、日本語には三人称の人称代名詞の呼称はないと言っても差し支えない。「彼」にしても「彼女」にしても、翻訳文化が登場しなければ実用に耐えなかったに違いない。こと、人間に関しては、日本語でニュートラルな人称代名詞を使用することは御法度であった。なぜなら、すべて人間は一個の独立した生命では存在しえず、社会のなかで規定された役割でしか認められないからであり——日本人の自己紹介が「△△会社の○○です。」は有名な話——、抽象的・中立的な人称代名詞など許容できなかったのである。言語表現の空間にはないが、それでも日本人が一個の存在として解放感に浸りたくなることはある。だから、「今日は無礼講で」とか「旅の恥はかきすて」などの非日常的の時間に対する憧れが文化のなかに導入される。そして、日本人は無名性を獲得したとき変身し、権力をもったときと同様恥ずかしいことを平気ですることがある。痴漢の生態が日本文化の研究として外国人にとりあげられたことを想起されたい。

個人主義の文化的伝統をたたえる三言語は、自分の意志を明確に伝えるためには便利な言葉である。たとえば、フランス語では受け身表現をきらう。おそらく、フランス人には自分の意志に反したり、集団の意思形成の過程で「～なっちゃった」たり「～されちゃった」などの状況は理解しがたいものなのだ。そうした結論のでる前に、各人は“yes, no”を表明する。しかし、日本文化ではそうはいかない。「意地（意志）を通せば窮屈だ。」となる<sup>6)</sup>。だから、フランス語が長いあいだ公用語とされてきたのは、外交問題をあつかう場合、双方の意志を明確に交換する必要があったからだと思われる。なにも、社交界がギャラントリーにみちた世界であったからではなかろう。逆に、日本では、会議がいかに長いか、そして、しばしば決定事項や契約がいかに無視されるか、外国人がよく問題とするところだ。日本人がまず決めなければならないのは、関係者の心情的コンセンサスであり、その後に結論がくる。前段であまりに時間を消費してしまうので、誰が、何を、いつ、どこで、どのようになどと、契約に本当に必要な事項を軽視する。日本人のあいだでは、正確かつ具体的に規定しようとする、そんなことはあからさまであり、さもしいことであり、無粋であるとされる。コンセンサスありき、あとはおのずから成るように成る、というのが日本人の粋（息？意気？）であり、「ア・ウン」の呼吸の正体ではなかろうか。今日では、おそろしい付帯事項を加えられた契約書を見かけることもあるが、それをきちんと読む習慣ができていであろうか？また、かかりつけの医者をもつのと反対に、顧問弁護士をもつ習慣がなかったのも、コンセンサス文化ならではのことであった。いさかいなど起こってはならないのである。

簡単に言えば、日本語は人間関係の感情ネットワークのなかで窒息寸前に発せられる言語であり、フランス語のみならず英語やドイツ語は個人の意志を口角泡をとばして発する言語なのだ。だから、日本人は言語活動のなかでも相手を気づかい、相手に理解されようとする。逆に言えば、日本人はそれが二人の関係であれ、会議の席であれ、地区の人間関係であれ、ひとつの集団のなかで孤立することを恐れるあまり、たとえ間違った理屈であれ数をたのみに判断したり盲従したりすることがある。しかしながら、欧米人は敵が何人いようと間違いは間違い、反対は反対なのであり、おのれが他人と違うのは当たり前なのである。彼らには絶対に正しいものは人間ではなく、神であるという信念があり——今日では神への信仰はそれほど顕著なものでは

ないが、それが普遍的真実とか客観的事実という概念に転化したと思えばよい——、そうした理知の働きをディスカッションの基本としている。したがって、日本人は責任を転嫁しやすい文化をもっており、欧米人は責任をとらなければならない文化をもっている。

閑話休題。日本語が「髪をセットさせた。」とか、「髪をセットしてもらった。」とか、対人関係をにじませた表現区別を必要とするのに対し、三言語が一つの文ですませられるのは、不思議と言えば不思議である——ちなみに、英語では“*She had her hair set.*” ドイツ語では“*Sie ließ sich das Haar frisieren.*”と表現できる——。このように、言語はわずかひとつの短文を比較してみただけでも文化理解へとつながる材料を提供してくれるのであり、言語と文化の関係を複数の言語、複数の文化にまたがって比較することは興行きの深い研究テーマとなるであろう。

## II. 「気」とは何か

われわれは日・英・独・仏の表現比較を行うことによって、それらの文化的特徴——とりわけ日本社会における情緒的集団意識の表現スタイルや、欧米社会における理知的個人意識の表現スタイル——が言語表現のなかに浮き彫りにされてくるのではないかと考える。こうした作業は外国語表現のメカニズムや外国文化についてのより一層深い理解をもたらしてくれるだろうが、それ以上に、日本語や日本文化にひそむ心性を理解させてくれることだろう。比較の方法は様々あると思われるが、それは選んだテーマによって決まってくると考える。そこで、今回は、日本語のひとつの言葉としては極めて広い意味領域のなかにただよう「気」に注目し、とくに「気」にまつわる表現の諸相を英・独・仏の三言語に翻訳することに的をしばって、できるだけ明快に比較してみたいと考える。

「気」表現に関しては、表現内容を明確に限定したり、考えや思いをストレートに主張したりすることを嫌う日本文化の影響を見ることができる。「どうも行く気になれない。」などは日本人の典型的な意志表示であるが、これなどは三言語に翻訳しようとするれば、主文としては「わたしは行きたくない。」としか訳せないものである。日本語では、いわば、「わたしを行きたくなくさせている状況」に主眼が置かれているようであり、曖昧というか婉曲というか表現から角がとれているが、欧文では「わたし」の「行きたくない」

意志を明確に表現しなくては文として成立しない。いや、表現そのものは可能だとして、行けない理由をあなたまかせにでもすれば、「こいつは主体性のない奴だ」と思われかねない。

記号論的にながめてみると、言語には音声形態と書記形態とがあって、一般的には、すべての言語は耳とか目をとおして発信し知覚される単位——これを「能記」とか「記号表現」*signifiant* と呼ぶ——と、受信者がうけとる情報内容——これを「所記」とか「記号内容」*signifié* と呼ぶ——とに区別される。これを交通信号にたとえると、信号の色「緑」が記号表現 (*signifiant*) であり、「進め」が記号内容 (*signifié*) となる<sup>7)</sup>。言語の記号内容に関しては、これほどはっきりした明示作用あるいは直示作用 (*dénomination*) をもたない場合が多々あるが、記号表現に関してはあきらかである。すなわち、「ハナ」とあれば「花」か「鼻」か「華」か「端」か「湊」かであるが——日本語は同形異義語 (*homonyme*) が多いので始末がわるい——、ちょうど偶然絵画か何かのなかでみかけた「緑」と信号の「緑」との記号的役割がコードの性格によって能記段階から異なるように、音声形態で発信された「ハナ」も当然発話のコンテキストのなかで、「花」とか「鼻」などの何物かに限定されているわけだ。記号表現としての「花」は共通認識のうえに立っているが、それぞれの言葉は個人の知識・経験に裏づけされたものであり、「花」という言葉のもたらす情報は千差万別であり記号内容は必ずしも共有できないものである。これを言語がもたらす含意作用 (*connotation*) という。

言語としての「気」について記号論的にながめてみると、音声形態をとっていても書記形態をとっていても、「気」は一語のみで記号内容を特定しない言葉であるといえる。すなわち、「空気」「勇氣」「本気」のように、「気」がほかの漢字と合成してなにものかを記号表記することはできても、「気」だけがなにを示すかは曖昧なのである。また、「一人で行くのは気がすすまない。」のように、「気」が述部と結ばれてはじめて意味を形成する場合は、この文が「一人では行きたくない。」を意味することから、「気がすすまない」の意味は了解できても、この「気」自体が具体的に何をさすかは依然として不明である。つまり、「今日は食がすすまない。」と比較してみれば、「食」が「食事」であれ「食欲」であれ、「すすまない」と個別的にまた合成的に意味形成したことは容易に理解できるが、「気がすすまない」ではそうはい

かない。われわれは直示的に理解するのではなく、慣用的に「気がすすまない」は「したくない」を意味するものとして了解しているにすぎない。ただ、ではなぜこうした慣用的表現が生まれたのか、そこに文化的合理性があったと考えるしかない。しかしながら、「気」は漠然としてはいるが一応定められた意味領域で生息していることは確かである。こうした言葉は日本語といえども珍しい例であり——「心」が似ていると言えるが、これはもともと内蔵の通称であったものが精神の意に転化し、「体」と対比される総称となったほか、「心臓」といった明確な意味をもっている——、曖昧であるがゆえに無数の表現を可能にしているとも言える。すなわち、「気」という言葉は、名詞でありながら一語だけでは記号内容を特定しがたい言葉であり、あまりに広い意味領域をカバーするがために、ほかの漢字と限定的に合成されたり、述部をともなった熟語表現のなかでのみ言葉としての機能をはたす不思議な言語である。

日本語のなかで「気」はどのような役割をはたしているかと言えば、たとえば「空気」「勇氣」「本気」などの漢字合成単語では、「気」は一語だけでは意味が不明であるが、「空」や「勇」や「本」が形容詞的な働きをして単語に特定の意味を与えているようだ。こうしてできあがった物質名詞にしても抽象名詞にしても、「空色」とか「勇者」とか「本棚」とかのように双方の漢字に物理的にあるいは概念的に明確に指定された意味があり、かつまた合成単語としてひとつの名詞をつくっているのと違って、「気」は「空」とか「勇」「本」などの語をともなって初めて単語として成立しているといえる。にもかかわらず、「気」にまったく記号内容がないとしたらやはり「空気」も「勇氣」も「本気」も単語として成立しなかったと考えられる。ここに、中国において「気」の哲学・思想が研究された所以がある。さらに、「気」は日本語のなかにはいって、相変わらず空気のように実体を掴みがたい存在でありながら、日本人の情緒を表現するためにはならない言葉となったのである。この「気」の特異な機能に着目して、「気」をもちいた表現が英・独・仏の三言語にどのように翻訳されるかを比較することによって、「気」の正体すなわちその意味領域を探ってみたい。

「気」について語るには、中国語いや中国の哲学・思想に通じていなければならないかもしれない。しかし今の所われわれにはその準備がないので、

識者の説を簡単にまとめて紹介させてもらうことにする。西暦100年に完成した辞典『説文解字』には「氣」は「气」ないし「氣」と記載されていて、「气」は「雲氣」、そして、むらむらと立ち昇る気体などの意もあったとされている。「氣」は祭壇や賓客に供する米穀や秣あるいは家畜の意などとされているほか、後になって加ったのだろうか、米を炊くときに吹きでる匂いや湯気の意との説もある。しかし、『説文解字』以前では、漢から秦、戦国期の出土物（絹の帛書や竹簡）には「氣」の文字しか登場せず、またさらにさかのぼった甲骨文字や青銅器の金文には「气」しか見当たらないことから、文字の形成には不明の部分が残されているようだが、『易』『孟子』『管子』『莊子』『荀子』『呂氏春秋』『老子』『淮南子』そして宋代の『朱子』にいたるまで、中国では「氣」が論じ続けられてきたという。「天地の氣」あるいは陰陽の二氣、五行の氣よりなる宇宙自然の氣にはじまり、その後、宇宙の根源・生成の秩序を一にもとめる太極、太一の哲学より「元氣」が登場する。さらに、氣・形・質の三始元の状態として太初・太始・太素の三氣の概念へと発展し、無と有の世界観が発見されるとともに、「氣」は万物を変化させる力と受け止められるようになる<sup>9)</sup>。

かくのごとき中国の哲学をひきずって「氣」は日本に入ってきたわけだが、日本語として帰化する際に、ときに「氣」を「け」と読むようにやまと言葉の「け」と共鳴して——「け」には「立ちのぼるもの、ゆらゆら漂うもの、しかと実体がかめめないもの（中略）だから、『け』は不思議なもの、異常なもの<sup>9)</sup>」の意味があった。また、赤塚行雄によれば、「氣（け）」は『源氏物語』の「け」「けはい」「けしき」「もののけ」などの「け」と関係があり、「『け』はプシュケーのごとくあたりに漂うもので<sup>10)</sup>」、「頭」や「化」や「怪」や「疫」に移行したものだという——、文化的融合現象がおこり、日本文化のなかで本家の中国人が驚くほどの発展を遂げたのである。

さて、『日本国語大辞典』の分類によると、まず「气」の項で「氣=氣」とあり、8項目に整理されている。

- 1) 「空間にあって目に見えないもの。」 空気・香氣・寒気・熱気・水蒸気など。
- 2) 「くうき。ガス。」 気化・換気・気圧・気球・気流など。

- 3) 「いき」氣息・氣絶・酒氣・氣管など。
- 4) 「心もち。心のはたらき。」意氣・才氣・氣鋭・狂氣・勇氣・氣概・氣性など。
- 5) 「自然界の目に見えないはたらき。」天氣・電氣・磁氣・氣象など。
- 6) 「物を動かす根源のはたらき。理。」氣勢・正氣・元氣・氣運など。
- 7) 「けはい。ようす。おもむき。いきおい。」活氣・陽氣・殺氣・雰圍氣・氣色など。
- 8) 「一年を24分した期間。」二十四氣・節氣など。

これらの分類は主に中国の「気」の哲学を色濃く反映した分類と考えられるが、その後で、「気」が日本語文献のなかに現れた実例とともに以下のごとく分類されている。

I) 変化、流動する自然現象。または、その自然現象を起こす本体。

- 1) 風雨、寒暑など、天地間に現れる自然現象。
- 2) 陰暦で一年を24分した一期、15日をいう。
- 3) 万物を成育する天地の精。天地にみなぎっている元氣。
- 4) 空氣。大氣。
- 5) 雲、霧、煙などのように、上昇する氣體。
- 6) そのもの特有の味わい、かおり。香氣。

II) 生命、精神、心の動きなどについていう。自然の気と関係があると考えられていた。

- 1) いき。呼吸。
- 2) 精氣。生活力。
- 3) 心のはたらき。意識。
- 4) 精神の傾向。氣だて。氣ごころ。
- 5) 緊張した、さかんな精神。氣力。氣勢。
- 6) 何かをしようとする心のはたらき。つもり。考え。意志。
- 7) あれこれと考える心。心配。
- 8) 感情。氣持。氣分。
- 9) 根氣。氣根。
- 10) 興味。関心。また、人を恋い慕う氣持。

### Ⅲ] 取引所で、気配（きはい）の事。人気。

『広漢和辞典』の説明と比較しても、日本語のなかにはいって、「気」がいかにかに日本人の「心の動き」を表現するために成長してきたかがわかる。日本人は理屈を理解しても気持が動かなければ動かない、とよく言われてきたが、この分類を見ただけでも分かるような気がする。

しかしながら、われわれ日本人にとっても、「気」の一語で具体的に何が意味されるのかいまだに不分明である。森羅万象をつきうごかすエネルギーだと言ったって、見せるわけにはいかない。したがって、『気』は『心』からでてくる目にみえない一種の触手、触覚、あるいは波長のようなものであり、それは別の言い方をすれば、『呼吸』であるとも言えるのである<sup>11)</sup>。そんな「気」を三匹の腹の虫にたとえることもあるようだが、回虫と違って見せるわけにもいかない。いかないが、なぜかそこには哲学的な存在感がある。「気」がほかの漢字と合成単語をなしたり、ひとつの表現形態のなかにおさまるや、日本人の心の現象学をあますところなく表現するからであろう。それでは、「気」に関する表現が三言語においてどのように対応しているのか、見てみよう。

## Ⅲ. 「気」の複合述語表現と外国語

### 3.1. 「言語文化学」的ひとつのアプローチ

前節において、「気」が日本人にとって概念としては存在するが、その実体は掴みにくいことをすでに指摘した。また、「気」を単独で捉えようとするとその概念そのものも不明確になってしまう恐れがある。そこで、本稿では、言語と文化の関係を探る前段階として、ある言語表現の意味概念はその使用のされ方を詳しく吟味することによって明らかにすることができる、という基本的考え方に則り、考察を進めていきたい。

また、本稿をとおして実践する「言語文化学」の独自の方法論のひとつとして、現代日本語における「気」の表現の特徴を明示的に示すために、与えられた文脈において対応する英語、ドイツ語、フランス語表現を考察し、解説するといったアプローチをとっていきたい。その過程において、まず当面の課題である現代日本語の「気」の表現の独自性あるいは多様性を明らかにしていけるばかりでなく、それぞれの外国語学習に役立つ表現面での記述研

究にも貢献できよう。また、こうした研究成果を利用することにより、外国語として学ぶ日本語教育への寄与も視野に入れている。

具体的には、「気」が複合述語の一部として用いられる表現に絞って考察を進めていきたい<sup>12)</sup>。以下に示すように、網羅的ではないが、日常の会話において使用頻度が高いと考えられる一般的な表現を慎重に選択し、特に、日本人にとっては、その意味を容易に理解できても、日本語を学ぶ外国人にとってはわかりにくいと思われる表現はなるべく扱うことにする。このようにして厳選された日本語の使用例を「あいうえお順」に挙げ、それに対応する英語、ドイツ語、フランス語表現を順に一例ずつ示し、解説を加えていく。その対応例については、その表現自体は各言語の母国語話者の判断を経たものであるが、日本語との対応関係についてはそれぞれの執筆者の力量にかかっている<sup>13)</sup>。ただし、いずれの例についてもそれが唯一の訳例ではないことを予め断っておかなければならない。解説のところで、他の訳例を示している箇所もある。また、その解説の記述にあたっては、実用的な観点からそれぞれの外国語で項目により濃淡はあるものの、表現上注意すべきことを中心に述べていき、平易な解説を心がけていきたい。この解説についても、紙幅の都合もあり、英語表現についてはその利用度も勘案し、やや周辺的な内容も盛り込むことにしたが、それぞれの外国語で与えられた日本語の「気」表現との対照を明示するための最小限の記述にとどめてあることを理解していただきたい。なお、「気」表現の日本語の意味については、主に【日英】の中で扱い、【独】、【仏】では、それぞれの対応する表現の記述が中心となる。さらに、与えられた文例における「気」表現に対応する各外国語の主たる意味領域を抽出することを試み、おおよそ A（知的領域）、B（感情領域）、C（意志領域）、D（特質領域）に分類して記号標示し、その分類に包含しにくいものについては、E として、その意味領域を各外国語で具体的に示すことにする。

## 3.2. 記述的分析

### 1. 気が合う

「彼はずいぶん年下だけど、とても気が合うんだ。」

- Though he is a lot younger than me, we've got a lot in common with each other. [E(+relation)]

- Er ist viel jünger als ich, aber wir verstehen einander gut. [A]
- Bien qu'il soit beaucoup plus jeune que moi, je m'entends très bien avec lui. [A]

【日英】「気が合う」を英語で表現する場合には、文脈に応じて様々な表現が可能で、文例のように年齢など何らかの相違点があるのにも関わらず「気が合う」という場合には、「共通点が多くある」と言い換えることができる。また、日常の行動などに基づく判断として「折り合いがよく、仲良くやっている」の意で「気が合う」という場合には、“S<人> get along [on] well with O<人>” の表現を用いることができる。さらに、互いの気質を問題として相性の良さを言う場合には、“S<人> be compatible with O<人>” の構文や、形式ばった言い方となるが “S<人> be (very) congenial to O<人>” の構文を用いて表現できる。さらに、文字通り対応する日本語としては「波長が合う」がぴったりとした表現となるが、“S<人> be on the same wavelength with O<人>” によっても近い概念が表せる。また、名詞 “chemistry” も「気が合う」関係を表すのにふさわしい語である：Their chemistry was good and they worked together well. (彼らは気が合って、仲良く仕事をしている。) [RHWD] くれた言い方では、“S<人> hit it off with O<人>” の表現も使える。次は、複数主語がきている例：Mary and Jane hit it off from the first. (メアリーとジェインは最初から気が合った。) [Makkai<sup>2</sup>]

【独】“einander gut verstehen” は、「互いによく理解している」の意味。「互いによく合う」なら “gut miteinander auskommen”, “sich mit jm. vertragen” が近い。ほかに、“gut aufeinander eingespielt sein” は、団体競技や合奏などで互いに足りないところを補って「息が合う」、 “ein Herz und eine Seele sein” は、心も魂も一つで「一心同体である」に近い非常に強い表現。「気」を意識して形容詞を探せば、“geistesverwandt”, “gleichgesinnt” などもあるが、これらは口語で使われることはなく、また、気質の相違があっても「何となく気が合う」こともある日本語表現とは、ずれを生じる場合がある。

【仏】「気が合う」に対応するフランス語表現としては、まず “s'entendre” が挙げられよう。その第一義的な意味は “Se comprendre l'un l'autre.” (お互いを理解し合う) である。そこから “s'entendre avec qqn = avoir de bons rapports avec qqn” (人といい関係にある) という表現が生じる。類義語としては、“s'accorder; sympathiser” などがあるが、後者は「最初の出会いからすぐに」という意味を内包しており、また、「仲良くなった」、「意気投合した」の意味では複合過去形での使用が普通である。前者には「より自然に性格や心が通いあう」というニュアンスがあり、

“On sympathise tout de suite, même avec des inconnus ; mais on ne s'accorde pas toujours ensuite.” といった文が成立しうる。

## 2. 気がある

a. 「彼はその女に気があるようだ。」

- He seems to be interested in that woman. [B]
- Er sieht aus, als sei er an der Frau interessiert. [B]
- Il semble s'intéresser à cette femme. [B]

【日英】ここでは「(異性に対して) 気がある」の意を表すが、日本語でその程度が漠然とした言い方になるのと同様に、英語において対応する“interested”は、単に「興味がある」ことから「ひかれている、魅力を感じている (be attracted to)」の意を表すことができる。直接的な like や love を用いるよりもやや婉曲的に響く。また、名詞“interest”を用いて、“take an interest in O<人>”としてもほぼ同義となるが、“have an interest in O”の表現では、Oにはもっぱら物事がくる [cf. PSED]。このほか、“be fond of”も可能だが、特にアメリカ英語においては女性的な響きを伴う表現となるので注意。くだけた言い方では、“S<人> fancy O<人>”の表現や、「大いに気がある」の意で“S<人> be keen on O<人>”なども用いることができる。[→12. 気に入る]

【独】名詞表現なら、“an *jm.* Interesse zeigen (haben)”となる。性的な意味での「気がある」なら、“auf *jm.* Lust haben”も使える。この表現は前置詞句に物がくるのが普通で、「食べたい気がする」の意。“Ich habe Lust auf ein Stück Kuchen.” [Wahrig] (ひとつケーキをつまんでみたい。)「好意を抱いている」の意味では、“*jm.* zugeneigt sein”, “*jm.* gern haben”, “*jm.* gern leiden können”、より強い露骨な表現としては“*jm.* haben wollen”も考えられる。

【仏】日本語の「(異性に) 気がある」という表現には幾分ペジョラティブなニュアンスが含まれている。“s'intéresser à *qqn/qqch*”とは、要するに人や物に対して何らかの“intérêt”を抱くことだが、この単語のもつ「好意」「関心」では完全には対応しえないであろう。

b. 「本当に働く気があるのなら、きっと仕事は見つかるよ。」

- If you really intend to work, you can find a job for sure. [C]
- Wenn du wirklich arbeiten willst, kannst du sicher einen Job

finden. [C]

- Si tu as vraiment envie de travailler, tu trouveras à coup sûr un emploi. [C]

【日英】ある動作や状態変化に対する「志向性」の問題として「…する[になる]気がある」という場合には、英語では、その意を意志動詞によって表せる。そのような動詞の中で、文例に示した“intend”が最も一般的な動詞であるが、直接的な欲求を表す場合には、“want”がふさわしく、「真意・本気」を強調する場合には、“mean”が好まれる。また、計画性のある場合には、planを用いることができる。いずれの場合にも、将来に対する「志向性」と呼応する形でto不定詞を従えることにも注意[cf. What do you intend doing about that?—PSED]。名詞“intention”を用いても表現できるが、この場合は、to不定詞と“of”を介して動名詞の両方を後続することが可能：I have no intention of resigning. (辞める気はまったくない。) [LED] ちなみに、MEU<sup>2</sup>では、“intention”がthe, his, an, anyなどの修飾を受ける場合にはto不定詞を用いる方がよいとしていたが、MEU<sup>3</sup>では、両形が同様に用いられるとし、MEU<sup>2</sup>の注記は削除されている。「意志・意向」を表すのに、“feel[be] inclined[disposed], “be willing to do”などの形容詞を用いた表現もしばしば用いられる。なお、英語においては、上記の動詞表現や形容詞表現の他に、助動詞あるいは準助動詞的な表現を用いても意志や意図を伝達することができ、“will”や“be going to”がその中心的役割を担い、幅広く用いられる。さらに、進行形を用いる表現でも（特に第一人称主語の場合）しばしば意図性が示唆されるが、この意図性は、進行形そのものによると言うよりは、文脈から生じる語用論的意味として位置づけた方がよいように思われる。ちなみに、くだけた米国語法では、“be not about to do”のような否定文で、「…する気が毛頭ない」の意で用いられる：I wasn't about to take orders from a nobody like him. (彼のようなろくでなしから命令を受ける気は毛頭なかった。) [CEED]

【独】例文訳では意欲を表す助動詞表現とした。より間接的に意欲を表現するのであれば、“gerne *tun* möchten”も可能。ただし、これに類した「気がある」は、一般にドイツ語では“zu *et.* Lust haben”で表現することができる。“Ich habe eigentlich keine Lust, ins Kino zu gehen.”[Bro-Wahr.] (本当は映画を見に行く気はない。)

【仏】「～したい」という「意志・願望」のたぐいを表わすフランス語の語彙は豊かだが、「気がある」という表現とは微妙に異なる。類義語としては“désirer”もしくは“souhaiter”。

### 3. 気が多い

「すぐ好みが変わるのは、気が多いからだ。」

- You quickly change your likes and dislikes, because you're so capricious. [D]
- Du bist so launisch, deshalb änderst du häufig deine Interessen. [D]
- Tu changes trop souvent de goût. Tu es vraiment capricieux. [D]

【日英】「気が多い男性」を英語で表現する場合に、「移り気で心変わりしやすい」という好ましくない意味では、“a man of many moods”と表現でき、特にそうした否定的な意味を含まず、「いろいろな物事に興味関心を持っている男性」の意では、“a man of many interests”と言える。いずれもやや形式ばった言い方。前者の場合、訳例で示した形容詞を用いて、“a capricious [whimsical] man”とも言える。特に、異性に対して「気が多い」という場合には、“a fickle man”が用いられ、男女を問わず“a flirt”や男女それぞれ“a playboy [playgirl]”も「気の多い男性[女性]」に対応する。

【独】ほかに“*sich verzetteln*”「ひとつのことに集中せず、何でもする」、単に時間配分のまずさということなら、“*schlechte Zeiteinteilung haben*”も場合によっては可能かもしれない。形容詞としては、いい意味では“*vielseitig*”であろう。否定的ニュアンスを持ったものとしては、“*wankelmütig*”, “*flatterhaft*”などが考えられるが、どちらも「気が変わりやすい」に近い。“*flatterhaft*”はもっぱら人間関係において「気が多い」ことを意味する。

【仏】和仏辞典には“*s'intéresser à tout*”（あらゆる物に興味をもつ）を挙げているものもあるが、日本語のもつマイナスのイメージは表現しえない。男女関係に限っていえば、“*Avoir un cœur d'artichaut.*”という譬喩表現があり、その意味は“*être inconstant en amour*”で「浮気っぽい」となるうか。

### 4. 気が大きくなる

「一般に、酒を飲むと気が大きくなりがちだ。」

- We tend to feel so uninhibited when we drink. [B]
- Im Allgemeinen wird man leicht großzügig, wenn man trinkt.

[D]

• En général, on est enclin à s'enhardir avec l'alcool. [D]

【日英】「気が大きくなる」というのは、束縛されない心の開放感を表し、文例に示した“feel (so) uninhibited”が相当する。さらに、日英語に共通する比喩表現を用いて、本来空間的な意を表す“expansive”を用いて、“S<人> get in(to) an expansive mood”という表現を用いることもできる。なお、人の好ましい気質について「気が大きい」という場合には、「度量の広い、気前の良い」に近い意味を表し、“generous[big-hearted, large-hearted]”などをあてることができる。

【独】“großzügig”には「気が大きい」と同様に「太っ腹な」の意味もある。ほかには、“großherzig”, “großmütig” などがあるが、どちらも文学的表現となる。単に「気前がよい」なら freigebig も可。口語の慣用表現として、“fünf gerade sein lassen”「5を偶数のままにしておく＝ささいなことにこだわらない」がある。比喩表現の、“sich wie ein König fühlen”（自分が王様だと思う。）も場合によっては可能かもしれない。

【仏】「大胆になる」の意。全体の表現としては、あるいは、“l'alcool nous donne de l'audace”と物を主語にした方がフランス的か。

## 5. 気が(の)置けない

「旅の道連れには、気の置けない人がいい。」

- Our fellow traveler should be someone we can feel at ease with. [B]
- Als Reisegefährten sind die zu wünschen, mit denen man sich wohl fühlt. [B]
- Comme compagnon de voyage, je voudrais avoir quelqu'un avec qui je me sente à l'aise. [B]

【日英】ここで「気の置けない」というのは、「遠慮の入らない、気遣いの必要のない」の意であるので、「気の置けない人」というのは説明的に「一緒にいてくつろげる人」ということになる。文例で、“ease”の代わりに“home”もよく用いられる。「気の置けない」というのは好ましい対人関係を表すので、“a very congenial friend”の表現や、折り合いの良さを述べて、“S<人> be easy to get along[on] well with”の表現を用いても意味的にはそうかけ離れたものとはならない。[→1. 「気が合う」]。<人>についていう場合が多いが、そのような雰囲気醸し出す事柄

についても用いられ、その場合には“an informal[casual] meeting”(気の置けない会)などが対応する。なお、特に若者の間では、「気の置けない」というのを「油断のならない、安心できない」の意で用いることもあるので注意 [cf. 『日本語百科大事典』p. 110]。

【独】“wohl”は“gut”でも良い。その他“entspannt”(くつろいだ)、“behaglich”(快適な)、“wie zu Hause”(我が家にいるように)など状況に応じてさまざまに置き換え可能だが、この文例の「気」はドイツ語では“fühlen”を用いた動詞表現となろう。英語からの外来語を用いて、“mit *jm.* relaxed sein”, “*sich* mit *jm.* o.k. fühlen”も日常語で普通に使われる表現である。

【仏】単に「気の置けない友人」だったら、“un grand ami”あるいは“un ami intime”とごくありふれた形容詞で対応させることも可能だろう。

## 6. 気が重い

「家族を連れて外国に行くのは気が重い。」

- I'm in no mood to take my family with me when I travel abroad. [C]
- Es belastet mich, mit der ganzen Familie eine Auslandsreise zu machen. [B]
- Ça me pèse de partir à l'étranger avec toute ma famille. [B]

【日英】「気が重い」というのは、さらに意味の下位分類をすると、「心がふさいでいる状態」を表し、「気が沈んでいる、気がめいっている」と同義的に用いられる場合と、「ある物事を行うことに対しておっくうになっている状態」を表し、否定的な意向を表す場合がある。文例においては後者を選択し、「気が乗らない、気が進まない」と同義的に解釈した。なお、感情面をいう前者の意では、“feel depressed [down, blue(*infml*)]”などで表現でき、逐語訳的に、My heart is heavy. とも言える[情緒的な語である“heart”を用いることにも注意]。

【独】“belasten”は単に経済的な面だけでなく、心理的負担も表現する。“sich belastend fühlen”もあるが、その場合は、“Ich fühle mich belastend, wenn ich daran denke, ~”のように何らかの補足が必要となる。

【仏】フランス語では、「(何かが)私の精神的な負担となる;私を悩ませる」という表現をとるのが普通。類義語としては“coûter; ennuyer; fatiguer; importuner”など。

## 7. 気が変わる

「どうしても駄目ですか。でも、もし気が変わったら知らせてください。」

- You never say yes? But let me know if you change your mind. [A]
- Unter keinen Umständen? Wenn Sie es sich doch noch anders überlegen, dann lassen Sie es mich bitte wissen! [A]
- Vous n'accepterez jamais? Mais, si vous changez d'avis, faites-le-moi savoir, s'il vous plaît. [A]

【日英】「気が変わる」という場合の「気」は知的作用として捉えられ、mind が用いられる。日本語では能動的に自然とそうなるといった表現となっているが、英語では他動詞表現として表されることにも注意。また、この場合には、逐語訳的に \*My mind changed. というのは通例不可。なお、特により好ましい方向に気持ちを変えような場合には、“S<人> have a change of heart” のように “heart” を用いた表現も用いられる：The government had a change of heart and gave the nurses an extra pay rise. (政府は気が変わって看護婦たちに特別昇給を与えた。)  
[PESD]

【独】“Wenn Sie eventuell doch Ihre Meinung ändern, ~” 「もし万一意見が変わったら」も可能であろうが、「気が変わる」を主体の曖昧な自動詞表現のままドイツ語に置き換えることは難しい。

【仏】「気が変わる」という自動詞的表現はフランス語では存在しない。あくまで主体がその意見・考えを変える、という形をとる。

## 8. 気が(の)利く

a. 「誰が電話してきたか確かめるなんて、子供ながらに気の利く子だ。」

- It's very smart of him, though he's just a little child, to confirm who gave us a call. [D]
- Obwohl noch klein, ist er schon aufgeweckt genug, sich zu vergewissern, wer angerufen hat. [A]
- Bien que petit encore, il est déjà assez éveillé pour demander son nom à celui qui a téléphoné. [A]

【日英】ここでの「気が利く」は「よく注意が行き届く」の意で、「気が付く」と同義的で、「彼女はよく気がつく」を説明的に言うと次のようになる: She quickly senses what you need and attends to it with care and consideration.[cf. 最所(1980)] 形容詞を用いて、そうした知覚能力に焦点を当てると“(very) perceptive”や“(very) observant”を当てることができ、相手に対する配慮をいう言う場合には、“(very) considerate”が相当する。また、文例のような文脈で、全体的に機転が利き、頭がよいことを伝える場合には、“smart[bright, clever, intelligent]”なども広く「気が利く」にあたる表現として用いることができる。なお、構文的には、当人の面前などで、人物に特に焦点を当てて、“S<人> be smart[clever, intelligent] to do”のように用いることも可能。[→17. 「気が付く」]

【独】“aufgeweckt”は「利発な」で、注意力に焦点を置けば、“aufmerksam”、配慮に重点を置けば、“umsichtig”, “sorgsam”などの形容詞となろう。

【仏】「大いに活発である」の意だが、子供について「気が利く」という意味合いを表現するときによく用いられる。和仏辞典には“attentionné”や“prévenant”を記載したものもあるが、前者は「好意、親切」をあらわし、後者には「相手を[におもねって]喜ばそうという意志」が含まれる。

b. 「彼の結婚祝いに何か気の利いたものはないかな。」(妻に尋ねる)

- Can you think of something appropriate for his wedding present? [D]
- Gibt es etwas, das Sinn macht, als Geschenk für seine Hochzeit? [A]
- Que pourrait-on choisir comme cadeau de bon goût pour son mariage? [D]

【日英】特に物事を修飾する場合には、「気が利く」は好ましい評価を表し、「しれた、粹な」の意に発展していくが、この場合にも“smart”をあてることができる。文例のような文脈では、「...にふさわしい、適切な」の意を表す形容詞も用いることができる。また、類似した文脈で、選択に対する評価として「気の利いた贈り物」というような場合には、“a well-chosen gift”などとも言え、英語においては後ろにくる名詞と関係してふさわしい形容詞を選ぶ必要がある。

【独】“passend”, “sinnvoll”も可能であろう。「気の利いた=おしゃれな」の意味では、“geschmackvoll”であろう。“Das italienische Restaurant ist geschmackvoll

engerichtet.”(そのイタリア・レストランは気の利いたしつらえとなっている)

【仏】「趣味(センス)のいい」が対応する。あるいは “[cadeau] bien choisi”、  
「洗練された」の意を込めれば “raffiné”。

## 9. 気が気でない

「あれ以来、いつまた大地震が起こるか気が気でない。」

- Since that big earthquake I have been very worried that there might be another one. [B]
- Seit dem Erdbeben bin ich tief beunruhigt, wann ein anderes, Großes kommen könnte. [B]
- Depuis ce tremblement de terre, je crains toujours qu'il y en ait encore un autre très grand. [B]

【日英】「気が気でない」というのは、「とても心配して落ち着かない様子」を描写し、英語ではそれに相当する動詞表現あるいは形容詞表現がこれにあたる。そのような感情を経験している主体を主語にして、“S<人> be very worried [anxious, uneasy] about O<人・物事>” の構文がしばしば用いられる。構文的に “It worry O<人> (so much) that...” や、主体を隠した “It be worrying to do” などは形式ばった言い方となる。逆に、特にアメリカ語法で “S<人> stew over [about] O<物事・人>” や “S<人> be in a stew over [about] O<物事・人>” の表現は、特に困難な状況にあって「気が気でない」にあたるくだけた言い方：You're in a real stew about this interview, aren't you? (この面接が本当に気が気でないようだね。) [LD<sup>3</sup>]. [→24. 「気にかかる」、27. 「気に病む」]

【独】名詞を用いた文語表現なら、“Seit dem Erdbeben hat mich große Unruhe erfasst, ~” となる。この文例の「気」はドイツ語の名詞では、“-e Ruhe”, “-e Fassung” に対応すると考えられる。

【仏】「[常に] 恐れている」の意。「心配でたまらない」の意味では他に “anxieux”, 「恐怖感」がさらに強まれば “angoissé ; effrayé” などをあてることができる。

## 10. 気が狂う

「この月末はあれこれ忙しくて、気が狂いそうだったよ。」

- I was so busy with this and that at the end of this month, I nearly went out my mind. [A]

- Am letzten Monatsende war ich mit Diesem und Jenem so beschäftigt, dass ich fast verrückt geworden wäre. [A]
- J'ai été si occupé à la fin de ce mois que j'ai cru en perdre la tête. [A]

【日英】「気が狂う」は、英語で表現する場合、正常な精神状態から逸脱するといった状態変化を表す表現で表せる。まともな知的判断ができないということなので“mind”が用いられ、そうした判断力を失うという意で“lose one's mind”もよく用いられる。文例以外に、好ましくない状態変化を表す go と形容詞あるいは名詞と組み合わせ、様々な表現がある： go crazy [mad, nutty (*infml*), insane, nuts (*infml*), bananas(*infml*), etc.] また、状態を言う場合には、次のような表現もしばしば用いられる： He was off his head with worry. (彼は気が狂うほど心配していた。) [CEED][この表現では“head”が用いられていることに注意。]

【独】“verrückt”は“wahnsinnig”に置き換えることもできる。“geisteskrank”だと完全に病理学上の狂気のみを表す形容詞となる。この項目の「気」は、「感覚」、「精神」にかかわることがわかる。

【仏】類似表現としては、“perdre l'esprit [la raison]”あるいは“devenir fou”。

## 11. 気が知れない

「どうして(彼が)あんなにブランドものに凝るのか気が知れない。」

- I just can't understand why he's so crazy about designer brand items. [A]
- Ich kann überhaupt nicht verstehen, wieso er so verrückt auf Markenartikel ist. [A]
- Je n'arrive pas à comprendre pourquoi il est si féru des grandes marques. [A]

【日英】「気が知れない」は、英語では、「相手の考え・意図が理解できない」といった認識作用として表現することができる。さらに、「考えが及ばない、想像できない」に近づくが、「気が知れない」はしばしば相手に対する批判、あるいはあきれかえった態度を表す文脈で用いられる。従って、後続する that 節の内容によって、強い驚きを表す“be appalled [amazed] that...”などの表現でも近い概念が表せる。

【独】主文にも狂気を表す形容詞を用いて、“Es ist wahnsinnig, dass er so ver-

rückt auf Markenartikel ist.”としても、ドイツ語として意味上の大差はないであろう。

【仏】「どうしても理解できない」の意。「私の理解を超える」という意味で“*Sa folie des grandes marques dépasse mon entendement.*”と表現することもできよう。

## 12. 気が進まない

「招待状は来たけれど、彼の家に行くのはどうも気が進まないなあ。」

- Though I received an invitation, I feel reluctant to visit his house for some reason. [C]
- Ich habe zwar die Einladung erhalten, möchte ihn aber irgendwie nicht so gern besuchen. [C]
- Il m'a envoyé une invitation. Mais je n'ai pas tellement envie d'aller chez lui. [C]

【日英】「気が進まない」は、文字通りには日本語では比喩的な移動表現となっているが、英語ではある動作や物事の実現に対する消極的な態度を表し、“be [feel] reluctant [unwilling, ill-disposed] to do”のような状態表現を用いて表現できる。「気が乗らない、気が引ける」も同義的。類例：He is unwilling to testify. (彼は証言をするのに気が進まない。) [RHWD]

【独】「気がある」の反対表現で、“zu et. wenig Lust haben”, “zu et. keine Lust haben”も使える。状況を表現する場合は、“widerwillig”あるいは“nur ungerne”であろう。“Daran habe ich widerwillig Teil genommen.” (気が進まなかったが参加しました。)

【仏】他に“ne pas avoir le cœur de ; ne pas être disposé à”が可能。

## 13. 気が済む

「僕が悪かった。気が済むまで殴ってくれ。」

- It's my fault. You can hit me as many times as you like. [B]
- Ich allein habe Schuld. Schlage mich, solange du willst! [C]
- J'ai eu tort. Tu peux me frapper autant que tu veux. [C]

【日英】「気が済む」というのは、気分が好転し、「満足して気持ちがおさまる」の意を表し、一般に、満足感を表す動詞“satisfy”、形容詞“satisfied”、名詞“satisfaction”を用いてそれぞれの構文で表現できる。ただし、文例のように「気が済むまで」となると、機能的には強調を表す副詞となり、文脈によって、量的[回数的]に強調する表現で、日本語に近くなる。「満足がいくまで」と置き換えて、“to one's satisfaction[one's heart's content]”も同様の機能が果たせるが、より形式ばった言い方となる。結果としての気持ちがおさまっている状態を強調して「気が済む」という場合には、次のような再帰動詞を用いても表現でき、「気がすつとする、気が晴れる(→22.)」に近づく：He consoled himself with the thought that he would pass the examination next time. (次の機会に試験に受かるだろうと考えて彼は気が済んだ。) [PESD]

【独】「君が望む限り」と意志を表す助動詞を用いた幾分マゾヒスティックな表現としたが、「君が満足する時点まで」なら、コンマ以下は“bis du damit zufrieden sein wirst”となろう。

【仏】「好きナだけ」の意。「満足」を表す場合は、“jusqu'à ce que tu sois satisfait”となろう。

#### 14. 気がする

「この写真を見ると、母が語りかけてくるような気がする。」

- Everytime I see this picture, I feel as if my mother was speaking to me. [B]
- Wenn ich dieses Foto ansehe, föhle ich mich, als ob meine Mutter etwas zu mir sagen würde. [B]
- En regardant cette photo, il me semble que ma mère me parle. [A]

【日英】この場合の「気」は、確固たる証拠のない直感的な気持ちを表し、「...の気がする」の表現で用いられるが、英語においては、“think (that)...”、“feel (that)...”や“have a[the] feeling ...”などのほかに、さらに根拠が希薄な場合に、“have a fancy (that)...”や“have a hunch (that)...”などの表現も用いられる：I had a hunch that she would invite Maurie. (彼女がモーリーを招待するような気がする。) [CEED]。また、類似性に着目したり、「実際にはそうでないのだが、そうであるような気がする」の意で用いられる場合には、訳例のように“feel as if...”の表現

が対応し、後続する節内の動詞形によってその確信度が表される。従って、次のような場合には、現在形を用いると現実味を帯び、情緒的な表現となる：I feel as if I'm [was, were] going mad. (頭がだんだんおかしくなっているような気がする) [CEED]

【独】例文の母はもはやこの世にいないと考えられるので、接続法2式を用いたが、確信度により第1式を使うこともできる。そのほか、“Ich habe das (unbestimmte od. dunkle) Gefühl, dass ~”も「気がする」に対応した表現であるが、いずれにせよこの項目の「気」は「感情」にかかわるものであることがわかる。

【仏】一般的には、非人称構文“il semble que”がそのまま対応する。「感情」をもう少し込めるなら“j'ai le sentiment que”となろう。他にも、「印象」の意で“j'ai l'impression que”もある。

## 15. 気が立つ

「妻は今気が立っている。この話は明日にした方が良さそうだ。」

- She is on edge at the moment. I guess I shouldn't bring up this story until tomorrow. [B]
- Sie ist jetzt nervös. Es wäre besser, morgen darüber zu sprechen. [B]
- Elle est énervée en ce moment. Il vaudrait mieux ne lui en parler que demain. [B]

【日英】「気が立っている」に最も近い表現は、同じ位置的な比喻表現を用いた文例の“get [be] on edge”であるが、この表現は「いきり立つ、興奮している」意で用いられ、動作的な表現では、“get excited about [over]O”を用いることができる。特に、いらだちを強調する場合には、“irritable[nervous]”などの形容詞でも表現できる。また、“be wrought up”の表現も可能：He became wrought up when he heard the bad news. (彼は悪い知らせを聞いて気が立った。) [CEED]。

【独】nervösは-r Nerv「神経」と関係のある単語。「立つ」に焦点を置けば、積極的な意味でも使用可能な“aufgeregt sein”もあるが、何が「立つ」のかは不明。“irritiert sein”は困難な状況でどうしていいかわからず、「いらいらしている」の意味となる。

【仏】「神経が高ぶっている」の意。類義語は“irrité”。「怒っている」の意で“être en colère”も可能。

## 16. 気が散る

「出ていってくれ。君がいると気が散るんだ。」

- Get out of here ! I can't concentrate on anything when you're around. [A]
- Geh doch bitte hinaus! Denn in deiner Gegenwart kann ich mich nicht konzentrieren. [A]
- Sors d'ici! Je n'arrive pas à me concentrer quand tu es là. [A]

【日英】「気が散る」は「いろいろなことに心が引かれて一つのことには集中できない」の意で、注意を奪われていることを描写する“S<人> be distracted by O<物事・人>”や集中できないことを強調して、“S<人> cannot concentrate on O<物事>,” “S<人> cannot focus one's attention on O<物事>,” “S<人> cannot pay one's attention to O<物事>”などの表現を用いることができる。

【独】“*sich konzentrieren*”は「精神、注意力を集中する」意味で、それに何らかの否定辞を付加すれば「気が散る」に対応した表現となる。「散る」に焦点を当てれば、過去分詞形容詞の“*zerstreut*”があるが、例文の文脈では使えない。ちなみに動詞表現の“*sich zerstreuen*”は「気晴らしをする」の意味となる。

【仏】「集中できない」の意。ただ、フランス語では他動詞的表現（他人の気を散らす⇒他人の邪魔をする）“*déranger ; distraire ; gêner*”などが用いられる場合が多い。

## 17. 気が付く

a. 「自分の過ちにはなかなか気が付かないものだ。」

- We don't notice our own mistakes so easily. [A]
- Man gibt seine eigenen Fehler nur ungern zu. [A]
- On s'aperçoit rarement de son propre erreur. [A]

【日英】「知覚、認識」に関して用いられる「気が付く」を英語で表現する場合は、対応する知覚・認識動詞を用いて表現できるが、その認識対象あるいはその認識のあり方が構文形式の差となって現れることに注意が必要である。“notice”について言うと、直接知覚的な場合には“S<人> notice O<物事・人>”や“S<人> notice O<物事・人> do[doing]”の構文をとり、思考過程を経た認識を表す場合には“S<人> notice that...”の構文をとる。「気が付く」は、ある認識対象を自覚するこ

とを表し、“notice”が最もよく対応するが、英語においては、このほか本来知覚を表す“see”や“find”などの動詞が認識動詞に転化されて用いられ、「気が付く」の意となる。また、形容詞“aware”を用いて、認識的な意味を表すことも可能。

【独】例文の目的語が「過ち」であるから“zugeben”を用いたが、認識、知覚にかかわる「気が付く」は、ほかに、“erkennen”, “bemerken”, “wahrnehmen”, “auf *et.* aufmerksam werden”などさまざまな対応表現がある。

【仏】「認識する」の意では他に、“constater ; se rendre compte de”などがある。

b. 「ふと気が付くと夜明けだった。彼の小説は本当に面白い。」

- The next thing I knew, dawn was breaking. Sure, his novel is very gripping. [A]
- Zu meinem Erstaunen bemerkte ich plötzlich das Morgengrauen. Sein Roman ist ja wirklich sehr fesselnd. [A]
- Sans que je ne m'en aperçoive, le jour s'était déjà levé. Son roman est vraiment intéressant. [A]

【日英】“the next thing I know”は、「ふと気が付くと」の意で、意外な出来事が生じて、驚きを表す成句。また、予期せぬ動作に従事していたり、ある状態にいることを表すのに、“find oneself ...ing”の構文もしばしば用いられる：I found myself having more fun than I had had in years. (ふと気づくとここ何年来味わったことのないような楽しい気持ちになっていた。) [COBUILD<sup>2</sup>] 補語の部分には、...ing形のほか、過去分詞、形容詞、前置詞句なども可能。

【独】例文前半部には、「夜じゅう読書に没頭して」という言外の含意があるが、ドイツ語に直訳してその含意が伝わるかは疑問である。例えば、“Plötzlich bemerkte ich das Morgengrauen. Sein Roman ist wirklich so fesselnd, dass ich die ganze Nacht alles um mich herum vergessen habe.”のように言外の含意も表現するのが、ドイツ語としては普通であろう。ほかに、“merken”, “wahrnehmen”, “auf *et.* kommen”などが、コンテキストに応じて使える。また、意識を回復するという意味での「気が付く」なら、“(wieder) zu *sich* kommen”であろう。

【仏】 a. の場合と同じ表現で対応させた。「気が付かないうちに夜が明けていた」の意。

## 18. 気が強い

「社長の意見に対して一步も譲らないなんて、彼も気が強いねえ。」

- Since he never gave way to the president in the argument, he's really a strong-willed person, isn't he? [D]
- Es ist sehr mutig von ihm, dass er vor der Meinung des Präsidenten keinen Schritt zurückweicht, nicht wahr? [D]
- Il n'a pas cédé d'un pouce face à l'opinion du président. Vraiment, il a du caractère. [D]

【日英】「気」が人の気質を表す表現で用いられた例の一つ。“strong-hearted”とも言える。文例の他に、「度胸の良さ」を言う場合には、“have guts”なども用いることができ、特に、相手に対して譲らない性格を言う場合には、“(quite) unyielding”の表現や、「気が強い」ということでよくない評価を加えたい場合には、“stubborn”などもあてることができる。

【独】“mutig”は勇気があるという意味で「気が強い」。ほかに、「気が強い」ことを表す慣用表現として、“*sich*³ nichts gefallen lassen”（絶対に譲らない）がある。

【仏】「気骨のある」の意。「人に対して毅然とした態度をとる」の意では“être ferme avec *qqn*”。

## 19. 気が遠くなる

「22世紀の地球の環境問題だって？気が遠くなるような話だね。」

- The environmental conditions of the earth in the 22nd century? It sounds like a far-reaching problem. [D]
- Die globalen Umweltprobleme im 22. Jahrhundert? Mir schwindelt, wenn ich daran denke. [A]
- La question de l'environnement sur terre au 22<sup>e</sup> siècle? C'est un problème qui donne le vertige. [A]

【日英】「気が遠くなる」は、「意識を失う」の意の他に、予想がつかず判断のできないような事柄について言及し、そのような印象を与える事にも用いることができる。文例では、広範囲に渡って解決策を講じることがなかなか困難であるの意を込めて、“a far-reaching”をあてた。より感覚的な面を強調したいときには、くだけた言い方となるが、“mind-boggling”を用いて、

想像の域を越えたものだと強意的に表現できる。

【独】"schwindeln" は生理現象を表す非人称表現で、「めまいがする」の意。文語調の表現だが、“Die Sinne schwanden mir.”（私は気が遠くなった。）は、本当に意識不明になる場合。遠大なという意味なら「気の長い」で、その場合の「気」はドイツ語でも「呼吸」で表現される。“Dazu muss man einen langen Atem haben.”（それは気の長い話だ。）

【仏】「めまいを起こさせる」の意。「想像を絶する」なら、“dépassez toute imagination”。形容詞 “vertigineux” も可。

## 20. 気がとがめる

「この上さらに父に無心するのは気がとがめる。」

- I feel guilty when I think of asking my father for more money. [B]
- Ich habe ein schlechtes Gewissen, den Vater um noch mehr Geld zu bitten. [B]
- Ça me donne mauvaise conscience de demander encore plus d'argent à mon père. [B]

【日英】「気がとがめる」という精神状態は「後ろめたさを覚え、何となく申し訳ないような気持ちになる」ことを表し、「良心の呵責 (a pang [twinge] of conscience)」や「罪の意識 (a feeling of guilt)」を感じるようになる。また、後悔の念が強い場合には、“be sorry” や “regret” などを用いることができる。

【独】“ein schlechtes (böses) Gewissen haben” は良心の呵責を感じるという意味で「気がとがめる」にあたる。

【仏】「何かをすることが自分に罪悪感を与える」という表現形態をとって、「良心がとがめる、後ろめたさを感じる」の意。

## 21. 気が抜ける

a. 「彼の返事を聞いて、すっかり気が抜けてしまいました。」

- After I heard his reply, I suffered a psychological letdown. [B]
- Seine Antwort hat mich sehr enttäuscht. [B]
- En entendant sa réponse, j'ai perdu courage. [C]

【日英】「気が抜ける」という表現は、人の精神状態について言及する場合は、「魂が抜けたような虚脱状態」を示し、訳例に示したように、精神的な活力が失せることを言う。一步進んで「落胆させる、意気消沈させる」という意の“S<物事・人> let O<人> down”や“S<人> lose heart”も対応する表現としてしばしば用いられる。また、緊張感が失せてしまう場合もこれに近い精神状態を表し、この場合には、逐語的に“My tension is [has] gone.”と言える。

【独】他動詞表現となり、「彼の返事が私をすっかり失望させた」の意味。ほかに、“ohne Schwung sein” 形容詞なら、“lustlos”, “passiv” などであろうか。

【仏】「やる気[熱意]を失った」の意だが、“Sa réponse m'a découragé.” 「彼の返事が私をがっかりさせた」の方が、よりフランス語的表現であろう。この場合“démoraliser” も同じ。

b. 「このワイン、もう気が抜けてしまっているよ。」

- This wine has already lost its flavor. [D]
- Dieser Wein ist schon abgestanden. [D]
- Ce vin est déjà éventé. [D]

【日英】「気が抜ける」は、特にビールなどの発泡性の飲料などについて用いられ、その場合、くだけた言い方では“go flat [vapid]” がぴったりとした表現となる。また、発泡性のない物についてもその風味・香りがなくなってしまうことを言うのに「気が抜ける」を用いられるが、その場合には文例のように説明的な表現を用いた方がよい。同義的に“lose one's freshness”とも言える。なお、“flat”は、比喩的に<人>についても用いることができ、“S<人>feel flat”で退屈感、虚脱感などを表し、21a. の意となる。

【独】“abgestanden”は長く放置したために変質したことを表す。“schal”も広く「気が抜けた」の意に使用できるが、もともとは特にビールに関して用いた。“fad(e)”はもとからの風味がよくないことに用い、「気が抜けた」とは若干ずれる。酒精という意味でのこの項の「気」にあたるドイツ語名詞は“-r Geist”、風味という意味なら“-r Geschmack”であろう。

【仏】「気が抜ける」にあたる“s'éventer”は、空気に長時間「触れた」ためにその香りや味わいを失うことを意味する。ここでは過去分詞で状態を示している。

## 22. 気が晴れる

「悲しいときには泣けばいい。少しは気が晴れるから。」

- It's all right to cry when you're sad, and then you can get a lift [B]
- Weine doch, wenn du traurig bist! Das erleichtert dich sicher ein bisschen.[B]
- Pleurez quand vous êtes triste, Ça vous fera du bien. [B]

【日英】「気が晴れる」は好ましい方向への状態変化を表し、「心配事などがなくなり気分がすっきりする」ことを表し、簡単に“feel better”な用いて、“You would feel better if you went on a trip. (旅行にでも行けば気分が晴れるよ。)”のようにも言える。また、物事を主語として次のようなあてても良い：I was a bit under the weather but the good news brightened me up. (天気の静で少し参っていましたが、よいニュースをきいて気が晴れました。) [最所(1980)]

【独】文語的表現となるが、後半を“Dann geht dir das Herz ein wenig auf.”とすれば、ここで問題となる「気」がドイツ語では「心」であることが分かる。「晴天」を表す形容詞“heiter”も場合によっては使える。

【仏】「～によい影響[効果]を与える；慰める」の意。「氣力を高揚させる」の意味で、“remonter le moral”。他に、“soulager”, “consoler” (苦痛などを和らげる)、“divertir” (人に気晴らしさせる)、“réconforter” (力づける) などがあるがいずれも他動詞である。代名動詞“se divertir”は「気晴らしをする」であり、日本語の「結果」のニュアンスは表さない。

## 23. 気に入る

「気に入ったものがあれば、何でも持って行っていいよ。」

- If you find something you like, you can take whatever. [B]
- Du kannst alles mitnehmen, was dir gefällt. [B]
- Tu peux prendre tout ce qui te plaît. [B]

【日英】「気」は<人>や<物事>に対する「興味・関心」、さらには「好み」を表す表現の一部として用いられる。対応する英語表現は、その度合いに応じて適切なものが選ばれる。ちなみに、“like→be fond of→love→be crazy[*mad*] (*infml*), be keen on”の順に、意味が強くなる。特に特別な理由がなく、「気に入る」というよう

な場合に“S<人> take a fancy to O<物事・人>...”の表現が用いられる。また、物事を主語にして次のようにも言える：A chocolate dessert took his fancy. (彼はチョコレートデザートを気に入った。) [RHWD] なお、“fall [be] in love with O”の表現は<物>についても言えることに注意：He had always been in love with the enchanted landscape of the West. (彼はこれまでずっと西部のうっとりするような景色がとても気に入っていた) [COBUILD<sup>2</sup>]

【独】“*jm. gefallen*”は「気に入る」に対応して広く使われている表現。付加語形容詞となった場合は、“*Lieblings-*”と複合語になる。“*-s Lieblingslied*” (お気に入りの歌)

【仏】これは“*plaire à qqn*”という表現がそのまま対応する。

## 24. 気にかかる

「妻の容態が気にかかって、仕事が手に付かない。」

- I'm worried about the critical condition of my wife and can't concentrate on my job. [B]
- Der ernste Zustand meiner kranken Frau liegt mir so am Herzen, dass ich beim Arbeiten nicht ganz bei der Sache bin. [B]
- Je suis trop inquiet de l'état de santé de ma femme pour pouvoir me concentrer sur mon travail. [B]

【日英】しばしば相手に対する「気遣い・心配」の意やある事柄に対する何らかの「懸念」の意を表す表現において「気」がしばしば用いられる。「気にかかる」というのは、「頭や心から離れない」の意で、“on one's mind”ということになるが、「心遣い」や「懸念・心配」を表す英語表現と対応し、そうした意を含意する動詞表現や形容詞表現を用いて表現できる。[→9.「気が気でない」、27.「気に病む」]

【独】“*jm. am Herzen liegen*”は心にかかるという意味で「気にかかる」にあたる表現。“*Angst haben*”, “*sich um et. sorgen*”などの不安・心配を表すそのほかの表現もコンテクストに応じて使える。

【仏】「不安である」の意。「心配する」の意味で、“*s'inquiéter de*”, “*se soucier de*”がある。

## 25. 気に入くない

「あいつのする事なす事、すべてがわたしには気に入くないのだ。」

- I hate every single action he does. [B]
- Alles, was der tut, nervt mich! [B]
- Tout ce qu'il fait me déplaît. [B]

【日英】「気に入くない」は、「好きになれない」という意から「しゃくに障る」というやや強い嫌悪感を表すのにも用いられる。なお、英語においては、“don't like→dislike→hate→abhor→loathe”の順に嫌悪感を増す表現となる。[cf. 23. 「気に入る」]

【独】他動詞“nerven”は神経にさわるという意味で「気に入くない」にあたる表現。“*jm. auf die Nerven gehen*”もほぼ同じ意味。単に「気に入る」の反対表現と考え、“*jm. nicht gefallen*”を使えば、“Alles, was der tut, gefällt mir überhaupt nicht.”となる。

【仏】「気に入る」の逆。「嫌悪感」を与えるのであれば“*dégôûter ; répugner à*”。

## 26. 気に障る

「率直に言わせてもらいます。気に障ったらご勘弁願います。」

- Let me be frank with you. Please forgive me if I hurt your feelings. [B]
- Ich will ganz offen zu Ihnen sein. Verzeihen Sie, wenn es Sie unangenehm berühren sollte! [B]
- Je me permets de vous parler franchement. Veuillez me pardonner si quelque chose vous vexe. [B]

【日英】「気にさわる」という場合、「感情を害する、不愉快にさせる」の意として用いられ、文例の表現以外にも、形容詞を用いて、同義的に“be offensive [disagreeable]”なども用いることができる。特に苛立ちを伴う場合には次のように表現できる：His constant complaining gets on my nerves. (彼はいつも不平ばかり言っていて気にさわる) [NHD]

【独】「気に」に焦点を置けば、“*jm. auf die Nerven gehen*”となり、25. と同一表現となる。

【仏】「人の気を悪くさせる、自尊心（感情）を傷つける」の意。類義語は

“froisser ; heurter” など。

## 27. 気に病む

「済んだことをいつまでも気に病んでいても仕方があるまい。」

- It is useless to keep worrying about what you have done. [B]
- Es lohnt sich nicht, dir Vergangenes immer noch sehr zu Herzen zu nehmen. [B]
- Il est inutile de te faire continuellement du souci pour ce que tu as fait dans le passé. [B]

【日英】「気に病む」は同義的な「気にかかる」と比べ、やや意識的にあれこれ心配することを表すが、英語表現では、いずれも“worry about[over]”で表せる。[→ 24. 「気にかかる」] なお、くだけた言い方では、次のような表現も可能：Nicki was always fretting over something or other. (ニッキーはいつもあれこれ気に病んでいる。) [LD<sup>3</sup>] ちなみに、名詞の ‘fret’ を用いた “be[get] in a fret” は、くだけたイギリス語法。

【独】“*et. zu Herzen nehmen*” はあることを深刻に受け止めるという意味で「気に病む」にあたる表現。ここでの「気」はドイツ語では「心」で表現される。

【仏】「気をもむ、心配する」の意。

## 28. 気を入れる

「気を入れて勉強しないと試験に受からないぞ。」

- You will fail the examination unless you put yourself to your study. [C]
- Du wirst die Prüfung nicht bestehen, es sei denn, dass du noch mehr Elan zeigst. [C]
- Si tu ne travailles pas avec application, tu échoueras au concours. [C]

【日英】「気」が全体的な精神状態の働きやあり方を描写する場合、その精神状態を制御することを表す表現が見受けられ、特に困難などに立ち向かう際の心構えとして「気を入れる」などの表現がある。このような表現を英語で表す場合には、文例のように、それぞれの精神状態の制御を含蓄する他動詞を用いて表現できる。この場合、

目的語に再帰代名詞が現れていることに注意。一般に、日本語の「気」を用いる表現との比較の観点からは、日本語では、精神状態を司る主体の<人>と「気」が分離されて、「気」がいわば客体化された形で表現されるが、英語においては精神的な働きかけが主体そのものに及ぶ形で表現され、それが再帰代名詞で具現化されていると言える。

【独】“bei der Sache sein”も「気を入れる」に対応した表現だが、もっぱら現在や過去の事柄に関してのみ使用可能で、文例のように未来にかかわる事柄には使えない。ほかには-r Schwungも考えられる。

【仏】「熱心に、勤勉に」の意。動詞形として“s'appliquer à”がある。

## 29. 気を失う

「その登山者は突然熊に出会って気を失った。」

- The mountain climber fainted when he ran into a bear. [A]
- Der Bergsteiger, der so plötzlich einen Bären traf, fiel in Ohnmacht. [A]
- Cet alpiniste s'est évanoui en se trouvant brusquement face à un ours. [A]

【日英】この表現の「気」は「意識」に関して言及しており、「気を失う」は文例のように動詞一語で表せるほか、再帰代名詞を用いた表現や「意識」に関わる形容詞である“unconscious”や名詞“consciousness”を用いて表現できる：He was knocked unconscious by a blow on the head. (彼は頭に一撃を食らって気を失った。) [NDH]

【独】“das Bewusstsein verlieren”（意識を失う）、“bewusstlos werden”も使える。意識にかかわる「気」表現である。

【仏】類義語は“perdre conscience [connaissance]; tomber en défaillance”など。

## 30. 気を落とす

「そんなに気を落とすなよ。またチャンスがめぐってくるさ。」

- Don't be so disappointed. I'm sure you can get another chance. [B]
- Lass den Mut nicht so sinken! Eine andere Chance kommt

bald wieder. [C]

- Ne te laisse pas décourager. La chance va tourner. [C]

【日英】訳例では、“disappoint”を用いたが、このほか“dishearten[discourage]”のような動詞（あるいはその過去分詞形）で表すことができる。なお、名詞が用いられる場合には、“lose heart”のように感情的色彩の濃い語句が英語表現として対応することに注意されたい。

【独】ドイツ語の“-r Mut”は単に「勇気」の意だけではなく、複合語“-r Lebensmut”におけるように「気力、元気」にあたる意味も含んでいる。単純に“den Mut verlieren”を使っても良い。別の名詞を使うなら、“den Kopf hängen lassen”も対応した表現。

【仏】「気力を失う」の意。そのほか“Ne sois pas aussi découragé.”も可。

### 31. 気を配る

「500人もいるんだ。参加者全員に気を配るのはとうてい無理さ。」

- We have as many as five hundred participants. It's quite impossible to take good care of each one. [A]
- Wir haben doch 500 Teilnehmer! Es ist auf jeden Fall unmöglich, sich um alle zu kümmern. [A]
- On a cinq cents participants! Il est absolument impossible de veiller sur tous. [A]

【日英】「気を配る」のように、「気」が対人関係あるいはある事柄・出来事との関係について用いられる場合には、そうした対象に「注意」が向けられていることのほかに、しばしば相手に対する「気遣い・世話」の意を表す。従って、“S<人> pay attention to O<人・物事>”や“S<人> be attentive to O<人・物事>”の表現や、訳例の表現を用いることが可能。

【独】“für et. (jn.) sorgen”もほぼ同じ表現。

【仏】類義語は“faire attention à ; prendre soin de ; être attentif à”など。

### 32. 気を付ける

「空気が乾燥しています。火の元には十分お気をつけください。」

- Please be very careful with fire, because the air is dry. [A]

- Die Luft ist trocken. Seien Sie bitte äußerst vorsichtig mit dem Feuer! [A]
- L'air est sec. Faites très attention au feu. [A]

【日英】ここでの「気」は「注意」に関連する。“careful”を用いる場合に前置詞の選択にも注意。一般に、「気を付ける」対象を表すのには“of”あるいは“about”が用いられるが、人や物の取り扱いを表す場合には、文例のように“with”が用いられる。ちなみに、言い切りの形で「気をつけて」という場合には、“(Be)Careful!”あるいは“Watch out!”などが用いられ、頭を伏せなさいと言う意味で「気をつけて」と注意を喚起する場合には、“Duck!”が用いられる。

【独】ほかに、“auf *et.* aufpassen”, “auf *et.* Acht geben”も対応する表現。ただし、常に空気が乾燥しているヨーロッパの気象状況下では、例文の因果関係は理解し難いと思われる。

【仏】「注意する、用心する」の意では“prendre garde à”も。「人に対して気を付ける⇒信用しない」の意が加われば“se méfier de”。

### 33. 気を取られる

「景色に気を取られて、危うくガードレールにぶつかるころだった。」

- Distracted by the scenery, I nearly ran into the guardrail. [A]
- Von der schönen Landschaft abgelenkt, wäre ich beinahe an die Leitplanke geprallt. [C]
- Distrait par le beau paysage, j'ai failli rentrer dans un garde-fou. [A]

【日英】この文例で、「気を取られる」は、従事していることとは別の事柄に注意を奪われることを表し、英語では“distract”が相当する。また、「気を取られている」となると、一つのことに熱中していたり、ある事柄が頭から離れない状態を描写する：Rod's completely preoccupied with all the wedding preparations at the moment. (ロッドはあれこれ結婚式の準備にまったく気を取られている) [LD<sup>3</sup>]

【独】文例のコンテキストでは、「ハンドルを取られる」意も含む“abgelenkt”が一番ふさわしいであろう。ほかに、“von *et.* gefesselt sein”も考えられるが、「生き生きとした持続的注意力を喚起されている」意の非常に強い表現で、一時的状態を表現

する「気を取られる」とのずれは大きい。

【仏】「注意がそれてしまって」の意で対応。

#### 34. 気を抜く

「気を抜くなよ。今が一番大事なときだから。」

- Don't let up right now. This is the most important moment. [C]
- Lass in deinem Eifer nicht nach! Jetzt ist ja eben die wichtigste Zeit. [C]
- Ne relâche pas ton attention. C'est maintenant le moment le plus important. [C]

【日英】「気を抜く」は、「張りつめていた状態から心をゆるめる、のんびりする」の意を表し、それに相当する英語表現が選ばれることになる。訳例はくだけた言い方だが、この他“relax (one's efforts [attention])”などもこの文脈で用いることができる。[cf. 「気を緩める」] ちなみに、「気を抜いた」の表現で事柄を修飾する場合には、否定的な評価を表し、「不注意な、熱意のない」などの意となり、“careless, perfunctory (*fml*)”などがあてられる。

【独】訳例は熱意が衰えるという意味で「気を抜く」に対応すると考えられる。動詞だけで“Nicht nachlassen!”としても良い。“*sich entspannen*”もリラックスするという意味で一般的には「気を抜く」に対応する表現だが、文例のような否定文では使えない。

【仏】「注意を怠る、気を緩める」の意。“se relâcher”も可。

#### 35. 気を回す

「そんなに気を回さないで、率直に彼の忠告を聞いたら。」

- You should follow his advice without being too suspicious. [A]
- Bekomm seinen Rat nicht in den falschen Hals und versuche, ihn zu beachten! [A]
- Ne va pas chercher si loin et suis sans hésitation son conseil. [A]

【日英】「気を回す」は、あれこれ余計なことを心配したり想像したりし、さらには猜疑心まで抱くことを表す。従って、“S<人>worry about O<物事・人>”の表現や訳例の表現を用いることができる。文脈により、文字通りには「想像力をたくましくする」にあたる“stretch imagination”も「気を回す」に近くなる。くだけた言い方となるが、“make one’s imagination go wild”も同義的表現。

【独】“*et. in den falschen Hals bekommen (kriegen)*”は他人の言説をねじ曲げて取ることを表す慣用表現。“*et.(jn.) beargwohnen*”は「疑念を抱く」の意で「気を回す」とは少しずれる。「あれこれ考えをめぐらせる」なら“*sich<sup>3</sup> über et.(jn.) zuviel Gedanken machen*”, “*über et. grübeln*”などがある。

【仏】“*aller chercher loin*”は「考えすぎる、わざわざ事をむずかしくする」の意。例文のもつ「(疑いの気持ちをもって) あれこれと考える」という意味をそのまま表現するものはフランス語には見あたらない。「妄想を抱く」という意味でなら“*se faire des idées*”, 「推し量る、～ではないかと思う」ならば“*soupçonner*”が対応しようか。

### 36. 気を持たせる

「あいつには気を付けろよ。いつも気を持たせるような返事しかりないから。」

- Be careful about him. He is always saying something that gives me a lot of reason to hope. [A]
- Pass doch auf den Kerl auf! *Der* gibt ja immer nur ausweichende Antworten. [C]
- Méfie-toi de lui. Il fait toujours des réponses qui donnent de faux espoirs. [A]

【日英】「気を持たせる」は、相手に思わせぶりなことを言ったりして気を引き、期待を抱かせることを表し、しばしば言動に実質が伴わないことを示唆する。また、特に相手の不誠実さを示唆したい場合には、“You are toying [playing] with my expectations, aren’t you?”で「気を持たせようとしているんじゃないの」のように言える。[cf. 「気持ちをもてあそぶ」]

【独】“*ausweichend*” ははぐらかすという意味で「気を持たせる」。励ますという意味の「気を持たせる」なら“*ermutigend*”であろう。「持たせる」に焦点を置けば、“*jn. mit (falschen) Hoffnungen(Erwartungen) hinhalten*”も考えられる。

【仏】「過てる希望を与える」という意。しかし、直截的すぎ、「気をもたせる」という表現のニュアンスに十分対応しているとは言えない。

### 37. 気を許す

「彼に気を許すのはまだ早すぎます。」

- You shouldn't let down your guard against him yet. [A]
- Vor ihm muss man noch lange auf der Hut sein. [A]
- Il est encore trop tôt pour lui faire confiance. [A]

【日英】日本語の「気を許す」は、「人に対して安心して心を任せる」ことを意味し、警戒心を解き放つことを表す。そうした「心の構え」を描写するには“guard”という語がふさわしく、そうした心の構えを解き、無防備になっている状態を表すには“S<人> be off (one's) guard (with O<人>)”のような状態表現も用いることができる：I was off guard when he hit me. (気を許していて彼に殴られた。) [PESD]。特に否定文で「<人>に気を許せない」では「信頼[信用]できない」に近くなり、“S<人> can't trust O<人>”などを用いてもよい。

【独】“auf der Hut sein”は「気を許さない」ことを表す慣用表現。「気を許す」なら、“*sich auf jn. verlassen*”, “*jm. vertrauen*”, “*jm. Vertrauen schenken*”などが考えられる。

【仏】「人を信用する」の意。この場合は逆に、“*se méfier de*”を用いた表現も考えられる。

### 3.3. 「気」表現とそれに対応する外国語（英語、ドイツ語、フランス語）の特徴

まず、第2節で見た様々な「気」の用法と、本節で吟味した複合述語の一部として用いられた「気」表現の分析をもとに、日本語の「気」の意味概念の広がりやを改めて集約的に述べておきたい。

元来、「気」は、「天地の間に充満する目に見えぬ靈気を表し、生命の活力となる素」と考えられ、その原義的な意をとどめて、外界におけるその物理的存在に言及し、「空気、天気、気象」などの表現で用いられる。しかし、「気」がこのような物理的存在物に言及する名詞の一部として用いられる以外に、現代日本語の日常的な表現の中で特に多く見受けられるのは、このような「生命の活力の素」としての「気」が人間に宿ると想定され、様々な様

相を呈する人間の精神状態を描写する用法においてである。そうした用法は、本稿で吟味した複合述語の一部として用いられた「気」表現に最も顕著に現れる。複合述語における「気」は、単独では、「意識に現れる精神のあり方やその傾向」といったプロトタイプ的な意味しか抽出できず、具体的な指示内容は、その連語する語句及びそれぞれの表現が用いられる文脈で具現される。そのほとんどは慣用表現として機能しているが、その意味的連鎖について言うと、全体的な「頭の働き、知力、心」の意を表すほか（「気が変わる」など）、ある状況に接して生じる直情的な人間の精神状態である「感情」から（「気が立つ」など）、「意志」（「気が進まない」など）、さらに人格に関わっての「性格、気質」など（「気が強い」など）の幅広い精神作用を表すに至っている。なお、人間以外についても、その物事自体に「活力源」が認められる場合には、「気」を用いることができ、物について言う場合には、そのものに含まれた特に香りや味として「気」が描写され、「気の抜けたビール」「香氣」などのように用いられることが多い。また、出来事の外面的な様相として、あるいは、場面から受ける漠然とした雰囲気的印象的に捉える表現として、「気」の用法も発達している（「気がする」など）。

日本語の「気」が幅広い意味領域を持っていることは、それに対応する外国語表現を眺めてみるとより一層明らかになるのではないか、というのとは当然の推論で、先行研究においても中国思想的な「気」の実体を認めた上で、それに対応する訳語を探そうとする試みがなされてきた<sup>14)</sup>。

本稿で示した「気」の表現の記述分析も、こうした先行研究と呼応するものではあるが、英語、ドイツ語、フランス語を総合的に捉え、かつ日常的で平易な表現の中にその対応関係を見いだそうと試みたものである。その結果、あえて、複合述語に現れた「気」に対応する語彙を列挙する形を取っても、それぞれの文脈において、英語では、“mind, head, consciousness, attention, interest, heart, feeling, mood, nerves, intention, etc.”、ドイツ語では、“Verstand, Geist, Bewusstsein, Interesse, Sinn, Gefühl, Ruhe, Sorge, Neigung, Wille, Lust, Mut, Geschmack, etc.”、フランス語では、“intelligence, intérêt, conscience, sentiment, souci, envie, intention, moral, caractère, goût, etc.”などが表す意味領域と重なり合うことが明らかとなった。さらに、英語表現の“My heart is heavy.”（気が重い。）のように、一部逐語的に重なり合う表現も見いだせることもあるが、複合述語

として用いられる「気」表現を、与えられた文脈の中で英語、ドイツ語、フランス語で表そうとすると、「気」が動詞あるいは形容詞の語彙の一部として吸収されてしまったり、再帰代名詞に投影されてその姿がまったく見えなくなってしまうことが多々あることが指摘できる。そして、その多くはそれぞれの文脈で再解釈する必要性が生じ、まったく異なった発想に基づく慣用的な表現がぴったりと当てはまるといったことも生じる。本稿で示した分析を踏まえると、「気」そのものに直接一対一対の形で対応する語彙が英語、ドイツ語、フランス語には存在しないというのは、もはや取り立てて言う必要がないほど自明なこととして理解できるであろう。

このように外国語による表現との対応関係からも、改めて「気」表現は日本語独自の幅広い使用域をもつものであることが再確認できたわけであるが、その背後には、すでに言及した中国思想に端を発した「気」が、やまと言葉と同化しながら日本人の思考様式あるいは行動様式と融和する形で、日本文化に定着してきた歴史的過程も見逃すことはできない。本稿で取り上げた「気」の複合述語的表現からのみ言えることだが、欧米人と日本人が共通して「意識に現れる精神のあり方やその傾向」を実体のあるものとして捉えているとしても、その所在が欧米人の思考様式では多元的に捉えられる傾向があるのに対して、日本人はまず一元的に「気」として捉え、複合述語の中にそれを組み入れ、はじめて多元的な意味を生み出す、といった迂回的な表現形式をとるのである。こうしたことは、自己主張を抑え、対人関係を重視するといった長年培われてきた我々日本人の行動様式にも合致していることは間違いない。漠然と直接的な言明をさけながらも、ある種の表現効果をねらって「気」表現が発せられるのである。共時的に現代日本語の中で考えると、複合述語としての「気」表現はそれぞれほぼある一定の意味領域を表す表現として機能している。しかしながら、そうした慣用句的な性質を持っていても、なお漠然とした意味しか表さない場合があり、文脈にその解釈を委ねてしまうことも多く、ひとつの表現をとってみても、曖昧性を潜在的に有することがある<sup>15)</sup>。その意味で、「気」表現に関しては、固定した語彙的意味を求めるより、文脈と相まって生じる派生的な意味を理解することに努めた方が「気」表現の本質的な理解につながり、日本人の精神のあり方を知る上でも効果的であろう。

最後に、本節で示した「言語文化学」の分析実践例から明らかとなった一

般的な問題点にも触れておきたい。本節の初めにそれぞれの外国語学習あるいは外国語として学ぶ日本語教育への寄与も視野に入れていると述べたが、特に「文化的背景を内包する語句」についての表現形態を学ぶ際には、単にその対応関係を示すだけでは不十分で、その前提となる文化的基礎知識を習得する必要がある。その提示の仕方についても、多くの辞書（和英・和独・和仏など）のようにただ単に対訳例を示すだけでなく、本稿で示したようにコンテキストに応じた解説を添える形が望ましいと言える。

#### IV. おわりに

我々が今回取り上げたのは、「気」の複合述語表現に限られている。しかも、それらを網羅したわけでもなく、ひとつの複合述語表現を多角的に検討することも、非常に興味深い研究となるはずであり、まだまだ総合的な「気」の分析となっているとは言い難い。

しかしながら、「気」の複合述語表現に対して、英語、ドイツ語、フランス語という三言語からその対応表現を求めた結果を眺めることによっても、「気」ということばのもつ意味領域が具体的に提示されただけでなく、日本語と欧米言語の表現構造の違いを通して、日本文化と欧米文化の違いを垣間見ることができたと思う。もちろん、欧米文化内での相違といったものも検討しなければならないが、今回の分析では詳述する紙幅はなかった。これに関しては、今後の課題として、常に念頭に置いていきたい。

本稿を手始めに、これまで純粋な学問領域の中ではなかなか本格的に取り上げられなかったテーマについても、ひとつのありうるべき「言語文化学」といった枠組みの中で積極的に取り上げていく可能性を示唆できたと思う。今後も言語と文化の統合的な研究プロジェクトを構築していきたい。本稿がその最初の一步として、「試み」ではあるもののひとつの役割を果たせたのではないかと思う。

つらつら思うに、無国籍マナーが席捲し、文化が地球規模で急速に平板化しつつあるこの20世紀末に、ことさらに異文化間の比較と違いを分析しながら「言語文化学」を揚言するのは、アナクロニズムの誹りをこうむりかねない。しかし、遙かかなたでひとつの新しい全地球の人間文化が誕生することがありうるとすれば、それは様々な文化が互いにその価値と他文化との差異を正しく認識し、止揚する以外にはないはずである。そのような射程で本

研究のプロジェクトが進展することを、筆者一同願っている。

## 注

1) その後垣内は「言語と文化との関係が強く認識され、国語学、国文学は素より、国語教育、更に、国語に立脚せる外国語教育に至るまで、すべて『言語文化』といふ一点から見直されようとするのは、最近の世界的情勢である。」とも言明している。(斎藤前掲書、pp.8-9.)

2) 斎藤前掲書、pp.57-58。(要約引用)

3) 認知言語学の旗手である R.W. Langacker は、その基本的な立場を Langacker (1997) において次のように述べている: "I would claim, then, that despite its mental focus, cognitive linguistics can also be described as social, cultural, and contextual linguistics. One manifestation of its cultural basis is the doctrine of encyclopedic semantics." [p.240] また、その結論部分でも、「言語使用」の分析の重要性を指摘している: "...: minds are embodied; that mental processing lets us interact with our surroundings and strongly shaped by these interactions; and the processing constitutive of language has to be studied and described with reference to the social and contextual interaction of actual language." [p.248]

4) *Petit Robert*, p.1071.

5) 参照、『詩学と文化記号論』、池上嘉彦、pp.272-340。『日本語から日本人を考える』、荒木博之、pp.36-50。なお、池上は前掲書のなかで、「John was killed in the accident [war]. 太郎ハ事故 [戦争] デ死ンダ。」を併記したあとで、「英語では be killed という受動態の代わりに die という自動詞を使うことも可能であるが、日本語では『死ヌ』の代わりに『殺サレル』という受身形を使うのは少なくとも普通ではなく、何かの特別の事情があったことを想像させる。(p.334)」と指摘する。

6) 森本哲郎によれば、『『個人の意志』』とはいうけれども、『個人の意地』とはいわないということだ。また、『男の意地』とはいうが、それを『男の意志』とするとおかしなことになる。(中略)『意志』が個人的なものであるのに対して、『意地』は集団的なものということができよう。(『日本語表と裏』p.191.)」確かに、一般的な用語規定としては賛同できるが、時には「まあ、そんなに(片)意地をはるなよ。」などの言い方も可能であり、個人レベルで用いることもまれにはある。

7) 『言語学から記号論へ』、池上嘉彦担当参照、pp.2-36.

8) 以上「気」の由来については、『気』の思想』および『気の世界』中の「気一元論」

(戸川芳郎著)を参照させていただいた。

9)『日本語表と裏』、森本哲郎、p.101.

10)『「気」の文化論』、赤塚行雄、p.47.

11) 前掲書、p.33.

12) 「気が合う」など以下に扱う「気」表現を複合述語の一部として見なす方が妥当であるという見解については、寺村(1982) pp.186-187などを参照。統語的な証拠として、以下の点が指摘できる：(i) 複合述語に用いられている格助詞と同じ格助詞と共起できる(彼が気が合う／あなたに気に入る／?彼のことを気をもむ)(ii) 複合述語の一部を疑問化することはできない(\*何が合いましたか?—気が合いました。/\*気がどうしたんですか?—気が合いました。)(iii) 動詞部を形容詞化して名詞を修飾できない。(気が合う—\*合う気/?合っている気/?合った気) こうした複合述語の形成過程としては、影山(1980)などのいう「編入」(incorporation)という概念を用いた一例として位置づけられる。

13) それぞれの母国語話者という立場から、有益な助言をしてくださった本学のカールトン先生(英語)、バックハウス先生(ドイツ語)、ニコラ先生(フランス語)にこの場を借りて改めてお礼申し上げたい。

14) 例えば、『気思想』における福井文雄の研究を参照のこと。

15) 例えば、「彼の様子が気になってしょうがない。」という文は、(i) 彼の魅力のせいであれば、「気になる」は、「頭や心から離れない」の意となり、(ii) 病気だったり、不幸だったりすると、「気になる」は「心配である」ということであり、(iii) 彼が自分と反対の考えや行動をとるのであれば、「気になる」によって「面白くない」ことを伝えようとしており、(iv) 彼が幸福の絶頂にあるのであれば、「気になる」は「ねたましい」という意さえも示唆する。

### 主要参考文献

赤塚行雄 『「気」の文化論』 創拓社、1990.

荒木博之 『日本語から日本人を考える』 朝日新聞社、1980.

有馬朗人著者代表 『気の世界』 東京大学出版会、1993.

池上嘉彦 『詩学と文化記号論』 講談社学術文庫、1992.

小野沢精一・福永光司・山井 湧(編) 『気思想』 東京大学出版会、1994.

影山太郎 『日英比較：語彙の構造』 くろしお出版、1980.

金田一春彦・林 大・柴田武(編) 『日本語百科大辞典』 大修館書店、1988.

川本茂雄他(編) 『言語学から記号論へ』(講座・記号論1) 勁草書房、1982.

- 斎藤武生 『言語文化学事始』 開拓社言語文化叢書. 1983.  
鈴木孝夫 『ことばと文化』 岩波新書. 1973.  
----- 『言語文化学ノート』 大修館書店. 1998.  
田中克彦 『言語学とは何か』 岩波新書. 1996.  
寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味 1』 くろしお出版. 1983.  
森本哲郎 『日本語 表と裏』 新潮文庫. 1992.  
諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎 『広漢和辞典』（中巻） 大修館書店. 1982.  
ラネカー、R. W. (Langacker, R.W.) "The contextual basis of cognitive semantics," in Nuys, J. & E. Pederson (eds.) *Language and conceptualization*. Cambridge University Press. pp.229-252. 1997.

（その他）

- 『逆引き広辞苑』 岩波書店辞典編集部編. 岩波書店. 1998.  
「しにか」（特集・儒教のキーワード） Vol.8/No.12, 大修館書店. 1997.  
『日本国語大辞典』（全10巻）. 小学館.

\* 記述分析に際しては、国内外の一般辞書・特殊辞書等を多数参照したが、その一覧については紙幅の関係上、本稿では割愛する。